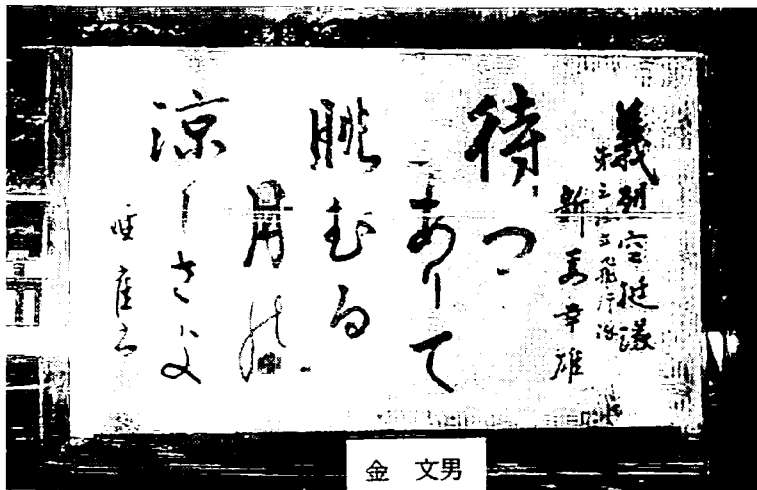
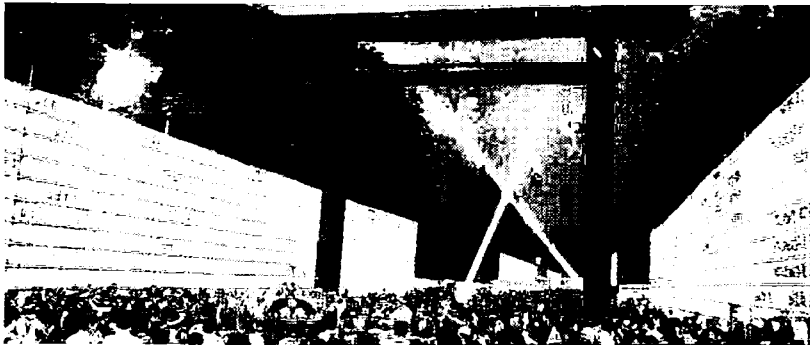


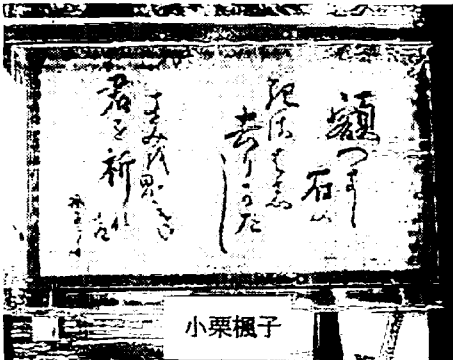
靖国神社みたままつりと 会員の雪洞献納



金 文男



新妻幸雄少尉(士57期)は義烈空挺隊の飛行隊である第三独立飛行隊の操縦者、20年5月24日、三番機の操縦者として健軍飛行場を立ち、隊長機と編隊を組み沖縄読谷に向かったが、強行着陸に成功したかどうかかわからない。三独飛には57期生は五人おり、皆何か一言書残している。新妻少尉の遺墨は禅味を帯びていて、透徹した心境が窺える。



小栗楓子



第106振武隊長 林義則

会報 特攻

平成16年8月

第60号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
FAX 03(3432)5567

編集人 田中 賢一
発行人 菅原 道照

目次

みたまま祭と会員の雪洞献納	1
みたまま祭の雪洞で見たもの	2
殉国沖縄学徒隊頭彰五十九年祭	3
沖縄における義烈空挺隊の慰霊祭	6
壁に盡忠の血書	12
陸軍海上挺進戦隊	13
海上挺進第三戦隊の最後の慰霊祭	14
特攻隊員「トミ・サイ」とは誰	16
ある特攻将校の生涯	20
無名勇士之墓	24
第二艦隊追悼式参列の記	27
特別攻撃に逝ける同期の戦友を悼む	28
ある特攻戦没者とその弟	30
第五十回知覧慰霊祭	31
六十年振りに手にした父の遺影	32
旧鹿屋基地特攻戦没者追悼式	33
慰霊祭で響いた「海ゆかば」	33
シエフタル氏と静大ゼミ	34
慰霊祭について思うこと	35
文芸欄	36
台湾・空古・石垣特攻基地巡拝記	37

みたま祭の雪洞で見たもの

田中 賢一

わが会員のものではないが、「ますらをのかなしき命つみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌を揮毫したものがあつた。奉納者は騎兵第十四聯隊の小林雅男氏である。

私はこの歌は戦争末期に特攻隊員の遺書や寄書きに出ているので知つた。心を打つ歌だと思つていたが、誰がいつ詠んだものかは、戦後になつて知つた。「蔵機関長故福田氏をしのびまつる」という題が付いていることも後で知つた。この歌と詠者のことは会報57号で触れたが、重ねて申せば、昭和二年八月二十四日島根県美保関沖で夜間演習中に、駆逐艦蔵と葦の二隻が衝突沈没し、死者百十九名を出すという大事故があつた。そのとき知人の福田機関少佐の殉職を悼んで詠んだ歌である

「かなしきいのち」というのは、単に人が死んで悲しいという感情だけでなく、国のため個人の命を投出すという崇高な情念が読み取れる。そこにはこの歌人三井甲之の精神が籠もっている。この気持の現れている三井先生の他の歌を紹介すれば、

われをすて、堪へむと思ふこゝろより
カギリナキ生命ノシルシナレ。
コトバコソ
宇宙ニヒロガル
ヘダテナキ
地上ノサカイヲコエテ
コノツナガリハ
イノチヲツナグ。
コトバハ生キテ
人ハ死スレドモ
コノ石ニコトバラシルス。
ココニアリ。
天地ノアヒダニアリテ
天地ニツラナリテ
コノ石ハ

みくに、つくすちからわきいづ
はらからのみくにのために命すてしこ
とをしぬびてつとめ来にけり
おほくの名もなき民らぞひのものとのま
ことのいのちをささふるものは

このような精神だつた為に戦後マッカーサーによる文人追放に遭い一切の文筆活動を封じられ、解除されないまま昭和二十八年逝去された。

三井先生の御長男は十九年にマーシャル群島で戦死され、次男は戦病帰還のうえ戦病死された。そのことについて詠まれた歌があると思ふが、私の蔵書には載っていない。

三井先生の書かれた墓碑銘「石にしるすことば」は次の通りと本に出ているが、私は現物を見ていない。

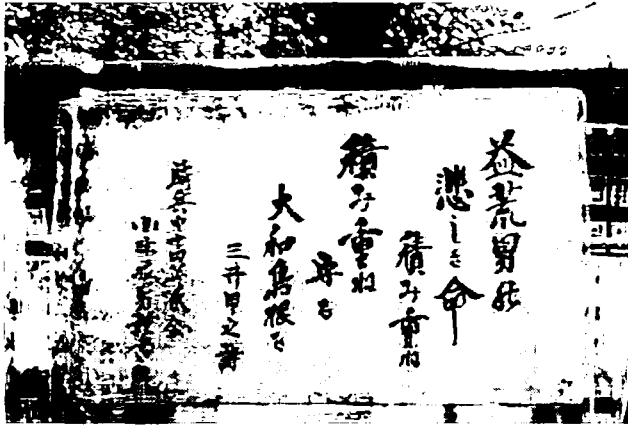
三井先生の書かれた墓碑銘「石にしるすことば」は次の通りと本に出ているが、私は現物を見ていない。

イマソノコトバラシルス。
ワガイノチノシルシナリ
ココニシルスヤマトコトバハ
この文面をみて私は支那の古典詩経の解説書毛詩大序にある次の一文を思い出した。

「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発するを詩と為す。情、中に動きて言形る」再び三井先生の歌にかへると、大正時代につくられた長詩に次の一篇がある。

《やまとことばに
やまとのいのちを
ともになうたひて
こゝにあつまる

友よ、はらからよ、
ともに喜び、悲み、泣き、憤り、
行かなむ、友よ、もろともに、
世界に於ける今の日本は
名もなき民のわれらの上に
押しかゝれりと感ずるときに
くしき力ぞわれらにあらむ》



殉国冲縄学徒

顕彰五十九年祭

我が協会の相談役でもある金城和彦氏が祭主となつてゐるこの祭典は、今年も冲縄慰霊の日である6月23日に靖国神社で行はれた。毎回のことながら祭文を奏上するのは大学生である。本年は中央大学法学部二年の森喜隆氏だった。その祭文の中で特に共感を覚える箇所を次に掲げる。

私は、今年二月冲縄戦没者慰霊顕彰のため冲縄を訪問致しました。ひめゆりの塔にも慰霊に参りましたが、その資料館の展示物は、冲縄は本土の捨て石にされたと言ひ、冲縄戦の悲惨さを宣伝する以外の何ものでもありませんでした。

冲縄戦を戦ひ抜かれた先人方が、後世に伝えんとされたことは、国家危急存亡の秋に際し、私利私欲を一切顧ず一致団結して国を護る精神であり、その先人方を慰霊顕彰することこそ、我が国を護り続ける礎であると確信するに至つたのであります。

しかしながら、大学の講義では歴史が歪曲され、冲縄戦を始めとする英霊の勲は語られることはありません。私も一学生として英霊の眞の御姿を学友に伝えて行くことに邁進して参る所存です。

ついで献案にうつり「海ゆかば」の独唱に続いて次の吟詠が奉納された。

(奉納吟) 嗚呼冲縄戦の学徒隊

今様 連詩 金城 和彦
和歌 金塚 ふろ
吟詠 八重 一

今様
矢弾の中で健氣にも 咲いて散りにし若櫻
尊き御霊よ安らかに 五色の雲に祈るらむ

詩
愛國の至誠烈火の如く 童顔の学徒防戦に當る
刀折れ矢盡き我が事畢る 相抱き相擁して遂に玉碎

和歌
悲しさのあまり井戸までかけたれど
水汲みし子の 足あともなく

詩
砲聲天を焦し弾雨降る 血河山野阿修羅の如し
学徒挺身死地に趣く 嗚呼忠魂萬古に蕉る

最後はゆには合唱団によって「冲縄県立第一中学校」の校歌と「冲縄師範学校女子部・県立第一高等女学校」の校歌が合唱され、ついで対馬丸の殉難学童に靈に「故郷」(兔追ういしかの山)が奉唱された。

冲縄県立第一中学校校歌

(四)

建国二千六百年

栄えある歴史億ぶれば
我等が務軽からず
いで中山の健男児
若き血潮のよどみなく
奮ひ励めよ國の為

冲縄戦殉国学徒数

入隊学徒	戦死者数	職員戦死者数	部隊名
県立師範学校男子部	300	288	鉄血勤皇隊
県立第一中学校	286	266	鉄血勤皇隊・通信隊
県立第二中学校	181	178	鉄血勤皇隊・通信隊
県立第三中学校	62	54	鉄血勤皇隊・通信隊
県立工業学校	130	109	鉄血勤皇隊・通信隊
県立農林学校	93	71	鉄血勤皇隊
県立水産学校	45	29	鉄血勤皇隊・通信隊
那覇市立商業学校	108	95	鉄血勤皇隊・通信隊
私立開南中学校	300	250	鉄血勤皇隊・通信隊
県立師範学校女子部	148	127	ひめゆり学徒隊
県立第一高等女学校	46	35	白梅学徒隊
県立第二高等女学校	(不明)	11	名護蘭部隊
県立第三高等女学校	60	52	瑞泉学徒隊
県立首里高等女学校	41	32	積徳学徒隊
私立積徳高等女学校	68	55	梯梧学徒隊
私立昭和高等女学校			

註 これらの数は昭和60年調査
疎開児童を乗せた対馬丸は19年8月22日敵潜水艦に撃沈され学童10名が遭難した。以上金城和彦著「嗚呼冲縄戦の学徒隊」に拠る

沖縄学徒隊員の遺書

特攻隊員を代表するものとして義烈空挺隊員の遺書を別の記事に載せたが、これに劣らぬ感銘を受けるのは、沖縄学徒隊員の遺書である。ここにそのいくつかを紹介する。

沖縄県立第一中学校の生徒たちが鉄血勤皇隊を編成し、第五砲兵司令部の隷下となったとき、全員が遺髪と遺書を残したが、激戦下これを甕に入れ地中に埋めた。戦後それを発見したので世に出ることになった。

御両親様

四年 小渡 壮一

どうか健在であつて下さい。私も今度鉄血勤皇隊に入り、郷土沖縄に上陸した敵と戦ひます。しつかりやります。御安心下さい万一私が戦死した時は、よくやつて呉れたと思はれて、決して嘆く様なことはしないで下さい。最後に御両親様の健康と御発展をお祈りします。さようなら。

身はたとひこの沖縄に果つるとも

七度生まれ敵亡ぼさん

野戦重砲兵隊 真壁にて戦死17才

父母上様

三年 仲泊 良兼

今度の戦は天下分け目の戦ひで、勝か負けるかの非常に至つたのであります。

国家の危機に馳せつけるのが、我ら青少年であ

ります。醜の御楯として出で立つに男子の本懐があります。せうか。

自分の體は、自分のではない。陛下の赤子であります。生を皇国に得て、国のために身を捨てるのは惜しまない。それが当然であります。自分の心に思い残すことはありません。自分は常に必勝の信念持して、国のために散つてゆくのであります。

戦ひは必ず勝ち、攻むれば必ず取る。父母上様よ、大日本は神国であることを念頭において、大事に當つて下さい。さようなら

砲兵司令部 勤皇隊本部 首里にて戦死 十六才

謹んで父母様に呈す。

三年 安谷屋盛治

戦局尙烈になつた沖縄は、空襲、艦砲射撃、砲弾一杯です。

祖母様始め、父母様、弟、妹、御元氣のことと申します。とにかく米英を撃つて撃つて撃ちまくつて、一日も早く大東亜共栄圏確立に邁進しようと思つて居ります。今度こそ敵さんの顔を見ることができます。自分は一人でも多くの敵をやつて死のうと思つてゐます。

大君の御為に命をささげて戦います。自分が死んだ後も、永久に日本の国は栄えることせう。

十八歳で二等兵になり入隊しました。

人生十八年、自分は喜んで死んで行きます。

安心して死にます。

お父さんにお顔ひします、自分の弟盛大は立派な軍人にして下さい。

お母さんにお願ひします、妹幸子は立派な日本の女性にして下さい。

大君の御旗の下に死してこそ

人と生れしかひはありけり

君のため何かをしまむ若枝

散つて甲斐ある命なりせば

砲兵司令部野戦重砲兵隊 真壁にて戦死 十六才

御父様

五年 長嶺 保

自分は生きている中は、何一つ孝養を尽くしませんで、死ぬに当たりこれ一つだけが残念です。自分も皇国の兵として立派に散ります。父上様に於ても御體を大切にさいまして、小生の分まで御奉公して下さい

御母様お元氣ですか。保も立派に散ります。

興直も立派な軍人にして下さい。順子も御国の婦人として恥かしくない様に御教育下さい。御姉様も元氣でやつて下さい。

家族一同様へ

皇国のため敵兵から郷土沖縄を守るために散ることは、日本男子としての本望であります。死ぬまで頑張ります。御安心下さい。

しかし乍ら今一度顔を見たかった。

砲兵司令部測地隊 首里にて戦死 十七歳

この学校のものはまだあるが、女生徒のものを県立第二高等女学校から。

御母様

大嶺美枝

いよいよ私達女性も学徒看護隊として出勤出来
ます事を、心から喜んで居ります。御母様も喜んで
下さい。

私は「皇国は不滅である」との信念に燃え生き
伸びて来ました。軍と協力して働けるのはいつの
日かと待つて居りました。いよいよそれが私達に
報ひられたのです。何と私達は幸福でせう。大君
に帰一し奉るに当つて、私達はもつともいい機会
を与えられました。しつかりやる心算居ります。

お母様は女の子を手離して御心配なさる事でせ
うが、けつして御心配なさいませぬ。私はお母様
の暖かい暖かいふところの中で、いつも可愛がら
れてすくすくと伸びて参りました。私はその暖か
いお母様のお教へを今こそ生かして、立派な日本
女性としてお国に御奉公する覚悟で居ります。

軍医のお教へ、先生のお教へを学び、友と固く
手を取り合つて懸命にやつてゆく心算で居ります。
いよいよ御奉公の時がやつて来ました。しつかり
やります。

お母様、私の身体はすべてお国に捧げたもので
す。その身体を私は大事に磨き上げ、国のために
つくします。

男でも女でも、詩にあります様に「国を思う道
に二つはなかりけり」で、忠孝の信念に変わりはあ
りませぬ。私の身体は国が保証して下さいさるの
です。私から何の心配もなさないで下さい。

散るべき時は立派な桜花となつて散る積もりで
すその時は家の子は「偉かった」と賞めて下さい

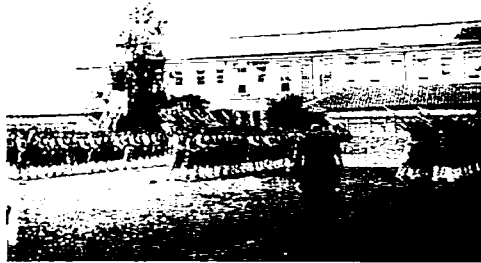
ね。

出勤するに当たりまして、気になるのはお母様
の健康ですが、どうぞ色々な事を御心配なさらな
いで、朗らかに明るくお暮し下さい少しの辛抱で
す。今にきつと日本が勝つて、大嶺家を立派に築
ける日があります。そしてきつと福の神がやつて
来ます。その時にはお母様は必ず幸福になられる
と信じて居ります。お母様、人間は気の持ちよう
一つです。いつもいつも明るいお気持で一日一日
をお過ごし下さい。きつとお母様の身体は健康に
なられることとせう。私が居なくなつたら、善ち
やん、弘ちやん淋しがかるかも知れ
ませぬね。

それからお父様は不自由なお體
ですから、御飯は暖かいうちに持
たせてやつて下さい。そしてお父
様にもいつも朗らかに気を持たれ
る様にお伝え下さい。出来まし
たらお父様は近くの塚にご案内し
らと思ひます。

空腹の時は善ちやん、弘ちやん
をよろしく願ひします。またそ
の時のために今から非常食を準備
しておかれた方がよろしいと思
ひます。本当にお母様一人に何か
ら何までお願ひしてしまつて申訳
もございません。

家においてある私のネルは、お
母様のものか善ちやんのものを作
つてお着け下さい。それから波の



県立第一中学校生徒たち



県立第二高等女学校（白梅学徒隊）の生徒たち

上神宮のお守りをおいてありますから、善ちやん
がもし出陣する際は弘ちやんにお守り袋を作つて
貰つて持たせてやつて下さい。
これから私は立派な従軍看護婦としてお国のた
めに参ります。
お母様、くれぐれもお身体を大事にされて善ち
やん、弘ちやんと明るく朗らかにお暮らし下さる
やうお祈りします。

美枝

最後に一家のご健康をお祈り致します。
二十年六月中旬高嶺村国吉で敵の砲撃で戦死

沖縄における 義烈空挺隊の慰霊祭

田中 賢一

この慰霊祭のことは既に何回か紹介したが、今回は空挺同志会として参加者を募集し25名も参加して盛大に行われたので、他の戦友団体の参考にもなろうかと思い、詳しく記述する。

この慰霊祭を主催するのは空挺同志会沖縄支部である。空挺同志会とは旧軍空挺隊員、自衛隊空挺の現職自衛官及び嘗て自衛隊の空挺部隊に在職した者(その中には在野の者と他部隊に所属している者がある)とで構成している。ところで沖縄には旧軍の該当者は既になく、支部の構成員は以前習志野の空挺部隊に在って現在は沖縄の自衛隊に在職している自衛官である。従って他の戦友団体と違い歴とした後継者がおり祭典も絶えることはない。

配布書類のこと。

さて今回中央から出向いた参加者の半数は戦後の者だったので、義烈空挺隊について理解させる為、「義烈空挺隊員の面影」と題する小冊子を作り事前に配布した。その内容の大半はこの会報に既に掲載したもので重ねて述べない、項目だけかかしておく。

義烈空挺隊概史

「義烈」建碑の由来

義烈空挺隊員の遺墨に思う①

同 ②

生き残り空挺特攻隊員の心境

同 続

義烈空挺隊員の遺品に懐く

中村大佐の手記

中野学校出身の義烈空挺隊員

これ以外に埋め草的に新に書き加えた記事があるので、それだけを左に掲げておく。

幽魂

八月十五日の停戦命令、これは内地にいる落下傘部隊にとって、正に晴天の霹靂だった。停戦とは敗戦降伏を意味するということが、暫し理解できないほどであった。

原子爆弾を投下され、ソ連の参戦をみるに至っては、戦勢挽回が覚束ないことは誰の目にも明らかである。が、一矢も報いずして、降伏とは。呆然自失の態だった。

勝つ見込みがないと感じていながら負けることを予期していないとは、愚なことだが、究極は己の生命と国家とが共に消滅してしまうのではないかというように、漠然と考えていた。

——死なば死ねとだに存すれば、何事も大事なし——

奥山隊不時着組の某小隊長は、この心境に達していると自から信じていたが、敗戦という予期しない大事の来襲に狼狽した。

(突入した部下は、どのように戦ったであろうか?)

奥山隊長の最後は? あれこれ思い廻らし問々としていたが、ある時唐瀬原基地の北方数十キロ門川

という町に死者と話が出来ると聞き、藪にすがる思いでその門を叩いた。

そこには二、三人の先客がいた。戦地にいる息子の安否を尋ねる人だった。

やがて順番がきて、用向きを聞いた老婆は小隊長を一室に招き入れた。敷居を隔てた薄暗い奥の間に祭壇がある。

老婆は端座して一心不乱に祈祷するその声は次第に昂じ、激し、鬼気迫るものがある。小隊長も初めは好奇心で見えていたが、いつしか霊界に引き込まれるような気になった。

かくするうちに、老婆の体は二、三回跳躍し骨の上に倒れ暫し絶句した。やがて平静に戻り後方を向いて座り直して言う。

「貴方の部下の方々は立派に戦いました。最後までよく戦いました。心残りはないと申されました。」

「それでは奥山隊長は?」

老婆は暫く黙っていたが、

「隊長さんは残念なりと一言申されました。」

小隊長は万感胸に迫って立てず、同行者(実は私)に扶けられその場を去った。

残念なりとは何を意味するのか。自己の生死は意に介せず、ときには事の成否すら眼中にないほど達観し切っていた奥山が、死してなお残念なりと言うのは何であらうか。

救国の悲願が達成されなかったことか、はた又、既に現れ始めている戦後の風調をさすのか。奥山の霊は

——自分は幼年学校以来諸上司の教を守っただけのこと、特攻隊に指定されて半歳余、部下は一

糸乱れずつき従ってきた。日本人の抱く滅私奉公の精神こそ、この見事な行動の根底をなすものなるに拘らず、これを否定する風調が既に現れ始めている。とても言いたかったのか。

健軍で見送ったある新聞記者は、戦後北海道へ帰り、西島曹長と田中伍長の遺族を尋ねた。そして翌年の五月二十四日田中伍長の遺族に書き送っている。

——思出の五月二十四日が巡ってまいりました。日々とうとくなる世の情でしょうが、御両親の御心中さぞかしとお推察致しております。今夜は小樽の西島曹長宅を訪ねて仏前に心を籠めて読経して参ります。御地までは仕事や汽車の都合でお訪ね出来ぬのが残念です——

田中伍長の郷里は北海道も最果ての地斜里郡小清水だった。

健軍飛行場における一回の出会いがこれまでに人の心を動かすとは。この人が篤実なのか、それとも二人の兵士の印象がそれほど鮮烈だったのか。

読谷飛行場跡で

第一日(6月11日)には古戦場である読谷飛行場跡に行った。途中飛行機のなかで「読谷飛行場に立って往時を偲ぶ」と題する小冊子を渡してあったので、それにもとつき現地で説明した。

その文面は次ページに掲載。

なおその冊子には、根拠資料として当時作成した作戦計画と、米軍が整備した当時の飛行場の写

真も付けておいた。作戦計画については機会を求めて紹介することにし、今回この会報には載せない。

碑前祭

第二日には摩文仁台上の「義烈」の碑の前で、神式で碑前祭が行われた。祭典は空挺同志会沖縄支部が主催するのであるが、現在は陸上自衛隊第一混成団長塚将補が支部長なので、同人が祭文を奏上した。それは特攻隊員の遺烈を讃え、自衛隊員もその精神を以って国防の任を全うするとの決意を述べたものだった。

ついで私は追悼之辞を奏上した。

烏兔匆匆 諸士が耻を決し敵飛行場に突入せられしより五十九星霜を経ぬ ここ「義烈」の碑前に佇めば 在りし日の面影彷彿たり 共に唐瀬原に武を錬りし友垣 志すところ異なるなきも 諸士は帰らぬ出撃となり 国に殉ぜられぬ 臉に残る諸士は明眸皓齒 匂うが如き若武者なるに 我は頽齡 老歩蹒跚 碑前に老醜を晒す

嘗て共に抱きし救国の悲顔 就中諸士が鬼神も泣かしむる壮挙も空しく敗戦に至りぬ 我ら戦後復興に聊か力を致し 祖国に経済的繁栄を齎らせど国民精神の荒廃著しく 国の現状英霊に告ぐるに堪えざるものあり

己れあって国家あるを知らず 権利あって義務あるを弁えざる大衆 政治経済文教の中核にある者敗戦の毒毒五体に蔓延せるか 金権万能 国家百年の計絶えてなし 靖国の御祭神を蔑ろにする政府 如何でか社稷非常の秋に対処するを得んや

我ら世論善導に努めあるも微力にして力及ばず後に続くを信じて逝かれし特攻烈士の遺託に応うる能わざるは 慚愧に堪えざるところなり 然れどもここに連なる自衛隊員は 我国元氣の中核にして 英霊に対する尊崇の念篤く 特攻烈士の遺囑に応うるを得べし 本日碑前祭を主催するはこの人々なり 乞う隣せ給え 我ら老耄 余命少なきも 掉尾の勇以て諸士が遺徳を世に宣揚せん 嘗ての戦友の誼を思い起し照覧あれ



読谷飛行場跡に立って往時を偲ぶ

暗黒の洋上を只管南下した編隊は、残波岬上空に投下された照明弾を目じるしに両目標の向かった。

照明弾を投下したのは、第六十戦隊の杉森機である。

「照明弾二発投下」と杉森機は無線で報告しているが、それをもって消息を断った。杉森英男大尉以下七名は特攻扱いとされ、二階級特進している。

第一百十戦隊長草刈武男少佐は戦果確認に同行した。機種は四式重である。草刈少佐は帰還して北飛行場に四機中飛行場に二機、着陸の信号弾を見たと報告した。私は戦後草刈さんとは度々合っている。このことについて尋ねたことがあるが、着陸コースに入ったとき信号弾を揚げたのではないかと答えた。

さて、送り出した側は、刻々迫る予定時刻に全神経を集中していた。義烈空挺隊との連絡は、行動を秘匿する為隊長機の無線で、変針時、本島到着、只今突入の三回だけ報告することになっていった。

健軍飛行場の粗末な作戦室には、通信所から引き込んだスピーカーが備え付けられ、天井から裸電球がぶら下っている。第六航空軍参謀長(菅原軍司令官は鹿屋に行っていた)第一挺進団長、その外数名の関係者が木の椅子に腰掛け固唾を飲んでいる。

予定の変針時は過ぎ、時計の音のみ空しく響く。この時の景況を第一挺進団長中村大佐の手記を借

りてみよう。

——遂に二二五〇変針時は連絡なしに過ぎた。

二二〇〇突入の時刻も過ぎてゆく。神仏の加護を叫ぶだけのきびしい至誠と確信。そして終局は神仏の手にゆだねられた運命への随順と諦観。そして一切が空……

俄然「二二二一只今突入」一瞬大きなスピーカーが仏に見えた。これが義烈空挺隊の最初にして最後の只一回の連絡であった。五月二十四日午後十時十一分、義烈空挺隊の胴体着陸が成功したのである——直に次室に控えていた報道班員や新聞記者にも伝えられた。ドッと上る歓声。「二二二五、同行していた第一百十戦隊長から「諏訪部隊成功」の無線が入った。

その頃から我が通信所の敵信傍受班は俄に忙しくなった。敵は火急の場合は生文で放送する。

最初に入ったのは二二四五、

「北飛行場異常あり」

義烈空挺隊が突入してから三十五分後である。

その後敵の電波は乱れ飛ぶ。「在空中機は着陸するな」

「島外の飛行場を利用せよ」

「母艦に着艦せよ」

「母艦の位置知らせ」

「残波岬の90度50渾に着艦せよ」

蜂の巣を突いたような騒ぎになった。以上が当時我が方が知り得たすべてである。

戦後十何年がたつて米軍の資料が手に入り、義烈空挺隊について次の通り記載されていた。

五月二十四日には、海岸及び沖合いの船舶に対

する日本軍の来襲は頻繁となった。二十四日の晩、天空は澄み渡り満月で爆撃には最適だった。二〇〇〇空襲警報が発令され、解除になったのは二四〇〇であった。この間来襲を重ねること七回に及んだ。

第一回来襲の数機は読谷、嘉手納の飛行場を爆撃し、第三、第四及び第六回目の来襲群も、飛行場に対する投弾に成功した。

第七回目の来襲群は「挺進隊」と呼ぶ双発爆撃機五機からなり、二二三〇頃伊江島方向より低空で進入した。対空中隊はこれを要撃し、そのうち四機は炎上しながら読谷飛行場付近に突入した。しかし最後の二機は胴体着陸し、読谷飛行場滑走路を東北から西南に滑走した。

忽ち少くとも八名の完全武装兵がこの機から躍り出て滑走路に添って配置してあった飛行機に向かって、手榴弾及び焼夷弾をもって攻撃した。このためコルセイアー二機、C-54輸送機四機及びプライベーター一機が破壊された。そのほか二六機(リベレーター爆撃機一、カルカット機三、コルセイアー機二)が損害を被った。

日本空挺部隊着陸のため起きた混乱で、アメリカ兵は戦死二、負傷一八を生じた。二二三八には増援部隊が到着し飛行場勤務部隊を支援し、更に来襲を予想する空挺部隊に対応する配置についた。この攻撃のため総計三三機の破壊損傷機を出したほか、ドラム缶六〇〇個分即ち七万ガロンのガソリンが炎上した。

調査の結果によれば、日本兵一〇名が読谷において戦死し、他の三名は飛行機内で対空砲火のた

め戦死を遂げていた。その他の突入機四機には、それぞれ一四名の兵士が搭乗していたが、何れも炎上した機内に散乱して発見された。遺体の総数は六九体を数えた。翌日一名の日本兵が残波岬で射殺されたが、おそらく空挺部隊最後の一兵士だったろう。

また別の書物には次のように載っていた。
 五番目の飛行機は、指揮塔から約二五〇フィート、東北から西南に伸びた滑走路に胴体着陸した。約一二名の日本兵が無事着陸し、少数の勇敢な者が如何なることが出来るかを実際に示した。

飛行場にあった飛行機が爆薬によって破壊され、炎上し始めた。コルセイアー三機、第一艦隊飛行団の二機及び輸送機四機が破壊され、その他二九機が損傷を受け、七万ガロンのガソリンが燃やされた。

この日本軍の挺進攻撃によって、想像を絶するような混乱が基地内に起きた。小銃機関銃火が乱れ飛び我が軍に多数の死傷者が出た。管制塔勤務のケーラー中尉は負傷後死亡し、他に一八名が負傷した。中には片足を吹き飛ばされた海兵隊の搭乗員二名を含んでいる。

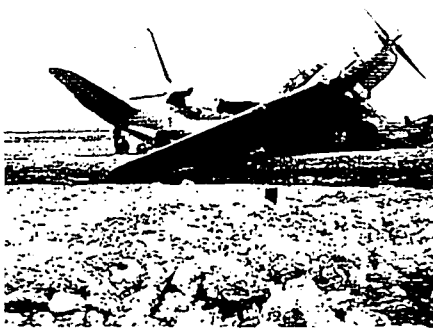
日本兵は損傷した輸送機に隠れて手榴弾を投げ、これによって一八名の内四名が負傷した。最後に残った日本兵の一名は、五月二十五日午後零時五十五分道路から藪に這込もうとしたとき、我が軍に発見され射殺された。合計六九名の日本兵の死体が数えられ、海軍設営隊の手で埋葬された。捕虜になったものは一名もなく、負傷した者は自殺した。日本軍はこの攻撃で飛行機九機を破壊し二

九機に損傷を与え、日本軍の損害は五機であった。もう一つ別の書物には米軍の混乱振りを次のように伝えている。

撃墜されなかった一機は、胴体着陸を強行した。その滑走がまだ停止しないうちに空挺隊員は飛行機から跳び出して、手榴弾や爆薬を近くにとまっている飛行機に投げ始め、さらにその一帯を小火器で掃射した。

この全く信ずることの出来ない突発事とそれに続く混乱の模様を、くわしく書くことはむづかしい。なぜなら話から話が伝わってゆくうちに、真実がわからなくなってしまうからである。

これらの記事を見ると、突入に成功したものは余りにも少ないことになる。しかも嘉手納に向かった部隊のことは全くわからない。今になってそれらを詮索しても手がかりはない。この大活躍した者がどの組かも判明しないが、義烈空挺隊全員の精神を歴史に留めたものと信じている。



破壊された米軍機



アメリカの記事を読んで松本武仁画伯の描いた油絵

義烈空挺隊員の遺書遺文

奥山道郎大尉

任官以来御世話ニナツタ方モ沢山アリ
マスガ
略シマス

此の度 義烈空挺隊長を拝命御垣の守

面白イ話モ沢山アリマスガ略シマス
付記

りとして敵航空基地に突撃致します

死後ノ処置ニツイテ
イ 金銭ノ貸借ナシ
ロ 婦人関係ナシ

絶好の死場所を得た私は日本一の幸福

者であります 只々感謝感激の外あり

ません

幼年学校入校以来十二年諸上司の御訓

戒も今日の為のように思われマス

必成以て御恩の万分の一に報ゆる覚悟

であります

拝顔お別れ出来ませんでした但道郎は

喜び勇んで征きます

二十有六年の親不孝を深くお詫び致し

ます

御母上様

道郎

阿部忠秋少尉

拝啓

御両親様

忠秋ハ本日敵飛行場ニ斬込ミマス

生前何一ツモ出来ズ申訳アリマセン

リツ 高坊ニハ呉々モ宜シク御伝ヘ下

サイ 祖父母様ニモ宜シク御伝ヘ下サイ

其レカラ私物梱包一個軍刀一個送リマ

ス 承知下サイ

二十四歳デ玉碎シマス

只今より沖繩決戦場に馳せ参じます
悠久の大義に生くる秋こそ 今この秋
を置いて再来せず 男児の本懐これに
過ぐるなし生前の数々の不孝厚くお詫
び致します

敏夫は父上様に生前何も子として
の務めを果さず先立つ事をおゆるし
下さい 然し陛下の御為に死するをも
つて忠即ち孝なりと信じ立派に戦つて
散る覚悟です 散るに先立つて敏夫の
気持は日本晴に爽やかで何の悔も未練
もありません

渡部利夫大尉

サイパン攻撃準備中に一月十七日付
で弟宛に書いた手紙の一節、

兄は今B-29基地たる「サイパン」
を攻撃せんとす 断じて一名たりとも
残さず殲滅せん 而して「サイパン」
の土となり永久に米鬼を咬み殺さんと
す

遺言書

宇津木五郎中尉

遺言書

一、分家スルニ当タリ生活諸物件(家、
土地)ハ兄ノ思召シニテ満足スルコト

このような書き出しで八個条に分か
れ、家憲書のように精練された配慮が
行間に溢れている。付記として、残置
する私物の品目を書き連ね、右品目中
軍服、長靴、軍刀等は子供のため一点
宛最上ものを残置し、そのほかは兄
に渡せと細かく指示している。

御面親様と宛名して書き残した中に
——我々は必ず任務を完遂します
私の墓は先祖代々の墓より大きくしな
いで下さい——とある。

青井輝行中尉(三独飛)

出発直前両親宛次のようにしたため
ている

可愛イ妹弥生ちゃんへ
兄さん兄さんとあれほど慕つてくれた
のに何等兄らしい事も出来ず
御国のために再び南海の戦場に行きま
す

妹宛手紙の一節、

新藤 勝曹長

可憐な妹弥生ちゃんへ
兄さん兄さんとあれほど慕つてくれた
のに何等兄らしい事も出来ず
御国のために再び南海の戦場に行きま
す

御面親様と宛名して書き残した中に
——我々は必ず任務を完遂します
私の墓は先祖代々の墓より大きくしな
いで下さい——とある。

青井輝行中尉(三独飛)

出発直前両親宛次のようにしたため
ている

可愛イ妹弥生ちゃんへ
兄さん兄さんとあれほど慕つてくれた
のに何等兄らしい事も出来ず
御国のために再び南海の戦場に行きま
す

妹宛手紙の一節、

新藤 勝曹長

可憐な妹弥生ちゃんへ
兄さん兄さんとあれほど慕つてくれた
のに何等兄らしい事も出来ず
御国のために再び南海の戦場に行きま
す

御面親様と宛名して書き残した中に
——我々は必ず任務を完遂します
私の墓は先祖代々の墓より大きくしな
いで下さい——とある。

青井輝行中尉(三独飛)

出発直前両親宛次のようにしたため
ている

関 三郎軍曹

遺髪と連爪に同封して書き残してあつた。一、大命降下勇躍征途に就きます。今までの重々の不孝は何卒御許し下さい。いさぎよく散る覚悟です。何も思い残すことはありません。よしや身は千々に散るとも来る春にまた咲き出でん靖国の宮

諏訪部忠一大尉 (三独飛隊長)

家訓

尊也日東国 亭生感激極
青雲入武窓 鍛練抜山力
敵父懇勲辞 祖来家訓垂
死島忠義鬼 無後護皇基

絶忠

恋闕至情是赤心
尊皇大義是臣道
磅礴天地宇内間
唯有神州不滅氣

渡辺裕輔少尉

谷川鉄男曹長

谷川曹長等は健軍で作戦準備中市内黒髪町の銭湯に度々入りに行き、女主人堤はつさんの世話になった。いよいよ出撃の前日となり一同改めて挨拶に行き、余った金いくらかを差し出した。二三日後配達された手紙には次の通り書いてあった。

おばさん、毎度御無理申上げ誠に有り難くお礼申し上げます。待機中の私達も愈々最後の任務に向かい突進致します。私達にいつも親切に慰めて下さつたおばさんの気持には感謝のほかありません。私たちも笑つて嵐に向かい、笑つて元氣一杯に戦い笑つて国に殉じ、笑つて皆様の御期待に報ゆる覚悟です。どうぞ元氣に皇国護持の為、東亜防衛の為頑張り下さい。

最後に御親切に対し感謝とお礼を申し上げ御一同様の健康を祈り上げます。愛機南に飛ぶ。乱筆にてさようなら。

谷川鉄男

この手紙を受け取りはつさんは泣き伏してしまつた。義烈空挺隊のことは連日新聞紙上を賑わし、全員玉砕と聞き、はつさんは置いていった七十五円を基金として自宅横の道路に面して普賢菩薩像を建てた。はつさんは既亡だが、香華は絶えない。

論語泰伯篇

鳥の將に死なんとするや其の鳴くや哀し人の將に死なんとするや其の言や善し

義烈空挺隊員の遺書を読んで

第一空挺団本中部隊

? 等陸尉 三浦 滋

6月12日、摩文仁の丘で行われた義烈空挺隊慰霊祭に、空挺団若手幹部代表として参列する機会を得た。我々、陸自空挺隊員は、旧陸軍落下傘部隊の伝統を受け継ぐ者として、いざ有事という時に躊躇なく任務を遂行できるよ、自分なりの死生観を確立しておく必要があると常々思っていたところであり、今回の慰霊祭参加は非常に有意義なものとなった。

136名の義烈空挺隊を指揮した奥山大尉は享年26才、他の將兵もほとんどが20代でありながら、特別攻撃隊の命を受け死地に赴いた。彼らの遺書遺文は、いずれも任務へのやる気に満ちた若さ溢れる内容であり、ひとつとして悲壯感の漂つたものはないが、それでいて故郷に残した家族への思いが痛いほど伝わってくる。

危険を顧みず、命を懸けて任務に進めるのは軍人であれば当然である。しかし必ず死ぬとわかっていて何の憂いもなく出撃することができるとあるうか。ほとんどの者が独身であり、思

い残すことはいくらでもあつたはずであるが、それらを振り切つた国家への忠誠心と任務への使命感には本当に頭が下がる。また、彼らが死に直面して

もあのように前向きでいられたのは、「国の為」という大義名分や自分の信念だけでなく、国を守ることはすなわ

ち何よりも大切な家族を守ることであると信じていたからであるということ。彼らの遺した言葉から感じられる。「後に続くを信ず」を合言葉に彼らは特攻を敢行した。自分が散つても、それを受け継いだ戦友がきつとやり遂げてくれる、というのが直接的に彼らが意図したところであろう。しかし現在の我が国の平和と繁栄が、彼らの尊い犠牲の上に成り立っているということとを考えれば、「後に続く者」とはこれから日本の将来を担う我々のことではないだろうかと感じた。彼らの遺志を受け継ぎ、これからも日本の平和の為に日々精進し、部隊の精強化に努めていこうと思う。

お知らせ

この度び、第五〇回知覧特攻基地戦没者慰霊祭記念誌「知覧特攻基地」が、知覧特攻慰霊顕彰会・知覧特攻平和会館管理組合によって刊行されました。振武隊員心得、振武隊知覧飛行場宿営間に於ける内務に関する心得、など、当時の極秘資料を初め、貴重な資料が収載されていて、史的価値の高いものであります。目下、更に若干内容を充実させて、一般頒布用を発行することが検討されている様であります。

壁に「盡忠」の血書 東洋紡績瀧崎工場の寮倉

陸軍船舶特幹第三期生

◎48戦隊 加藤 貞夫

小豆島・土庄町東洋紡績瀧崎工場の女子寮を解体中、平成12年12月5日正午頃寮の戸棚の奥の新聞紙を貼ってあるのを剥ぎとってみると、壁一面に「血書」らしきものが発見された。

この寮は戦時中昭和18年9月から20年9月まで陸軍船舶特別幹部候補生隊・陸部隊の兵舎となった。この寮も16才から20才の若き船舶隊員の宿舎として一期生から三期生まで特攻隊員として訓練され出動したのである。

四期生は20年9月までこの宿舎で起居して終戦を迎えた。

盡忠

本土決戦

一億特攻！されど大詔一度下りて、大東亜聖戦終る。我等右の一念止み難くガダルカナル以来皇軍の善戦健闘に不拘遂に未曾有國難、真に危急存亡の秋に再會するに及び、決然一死以て現御神の御宸襟を安んぜ奉らん。早春冷哨を冒し、小豆島任務……
てより……所謂

船舶特幹第三期生にて烈々純忠の念

に……かなへられ
全員特攻の命を拝し我ら歡喜や躍せ……
に其の心の成らんとして果たさず。
我らの悲憤阿蘇山に比すべし……
得る所にあらざるなり。

我ら復員の命を受け、この懐しき小豆島の兵舎を離れんとするに際し、感慨借くあたわず。上記の決意も愈々難く、武勇の戦は終らんとす。一日平和の如しも近き将来現世を現出することを必せり。
我らの言はんと慾すれば

断じて

日本は負けたるにあらず。

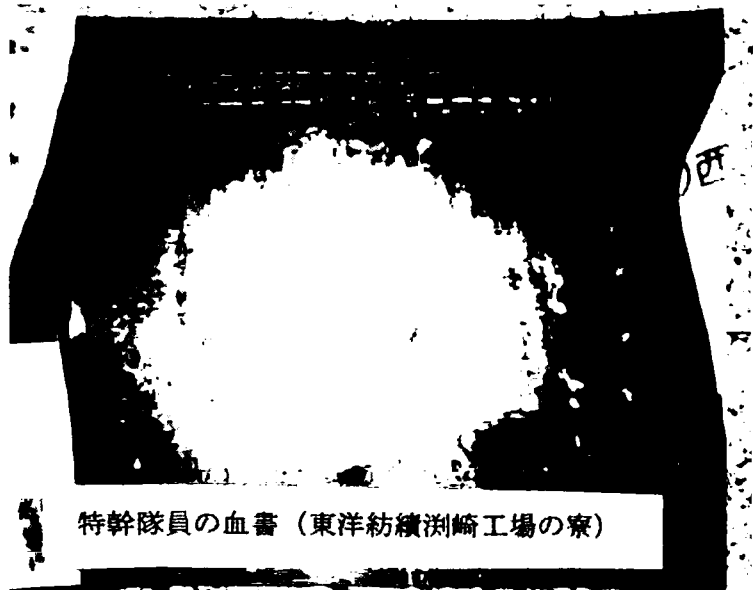
(文字の不明なる所は……)

新聞紙のノリのついてる部分を剥いでみると、鮮血で揮毫したとみられる赤い色素が浮んでみえる。
終戦を迎えた若い兵士たちの純血がさわいでいたと思われる。

(小豆島新聞より)

血書は昭和20年9月ごろに書かれたとみられ血がしたたり落ちた「盡忠」という二文字を題に「本土決戦」と続き全二十三行ある。特攻の覚悟があったが戦争が終わり、復員命令を受けた若き特攻隊員のやり場のない気持ちを書かれ、文末は「断じて日本は負けたるにあらず」で結ばれている。

戦況がますます悪化するなか、旧陸



特幹隊員の血書 (東洋紡績瀧崎工場の寮)

血書は、八紘隊の兵舎として使われていた建物の解体中、押し入れ内側のモルタルの壁(幅一・七米、高さ一・三米)一面に、新聞紙が張られた状態で発見された。新聞紙をはがすと、変色してはいるが、血で書かれたと分かる文字が現れた。

(建物は戦後返還され、再度入居の女子工員が気持悪がって新聞紙を貼ったのではと考えられる。)
平成15年2月19日
東洋紡本社から6月
末めに工場閉鎖の

軍は特攻隊員を養成する教育隊「陸軍船舶特別幹部候補生隊」をこの地に置いた。部隊は「若潮部隊」と呼ばれ、16才から20才までの青少年たちが訓練に励んでいた。
四か月間の訓練後、多くの部隊が極秘のうちに前線などに転属するが、一部、甲種幹部候補生としてさらに訓練を受ける部隊「八紘隊」も同工場敷地内にあった。
方針を和田三期生会長に通知が届いた。血書の壁の保存について急遽小野厚工場長と協議。取り敢えず11月23日の船舶特幹隊、5年に一度の全国合同慰霊祭まで、「血書の壁」の保存と見学などを要望し、その足で三木佑二郎・土庄町長を訪問。壁の保存の協力を申し入れた。三木町長は町議会会で、町民からも保存を願う声があることを伝え、工場跡地利用と合わせて壁の保存を具

体化させることを明らかにした。

年明けて平成16年町長は、保存には専門的な技術が必要なため靖国神社の遊就館に保存状態などの調査を依頼。

坂明夫同館部長と大山晋吾史料課長が東洋紡瀧崎工場を訪れ現物を観る、「紙に書いた血書は多いが、壁に書かれたものは初めて、大変貴重な資料」と話し、早急に適切な方法で保存する必要を強調していた。

町長から永久保存に同館への寄贈を申し出ると(血書の部分の切り取り作業などの)費用が算出され次第、寄贈の時期を決めたいとして坂部長は寄贈の申し出を快諾。

「特攻隊魂「血書の壁」安住の地へ」(産経新聞全国版)

自らの命を国に捧げる気持ちをつづった血書。昨年6月に工場が閉鎖され、保存方法が注目されていたが59年の歳月を経て安住の場を得ることになった。平成16年2月2日「血書の壁」が保管されている東洋紡瀧崎工場から搬出され、町長始め地元住民らが見送った。

搬出を前に、靖国神社の大山晋吾権全などを祈願した。靖国神社では遊就館に保存し、早ければ大ホールでの6月からの一般公開を準備中である。

(投稿者加藤貞夫さんは6月5日に逝去され、この記事が絶筆となる)

陸軍海上挺進戦隊

若潮会(特幹四期) 場田坂幸夫

◎発足の経緯

昭和18年9月29日、船舶部隊の拡大にともない、船舶兵種を創設し同年11月船舶特別幹部候補生制度が設けられた。この頃落下傘部隊の菅原久一大尉(陸士51期)のち海上挺進第10戦隊長)

が、自ら率いて敵にあたるため、速力五十節くらいの高速艇の作製を陸軍省に意見具申しした。中央部はこの種決死兵器には同意しなかった。

昭和19年4月、陸軍船舶司令部(広島市宇品)内で、鈴木宗作司令官以下関係者間に海上の防衛は航空部隊のみに限ることなく、船舶部隊自からの手で実施すべきだとの意見が強まった。そのため簡単に軽量の攻撃艇をあらかじめ敵の予想上陸正面に配置し奇襲によって上陸船団を側面から攻撃する着想をたて、野戦船舶本廠に舟艇の試作を、また戦法等について船舶練習部それぞれ研究を担当させた。

また、これとは別に大本営陸軍部でも、この目的のため兵器行政本部と第十技術研究所に、肉迫攻撃艇の開発を命じていた。

昭和19年7月海軍の◎艇と陸軍の試作艇の比較試験を行ない、各種の要件

を充たすことで、第十技術研究所の試作になる甲一号型を採用することに決定した。

この艇は、長さ五・六米、幅一・八米、吃水〇・二六米、満載排水量約一・五噸、最大速力二〇ノ二四節、航続時間三・五時間、二五〇斤爆雷一個装備のペニヤ板製の半滑走型で、秘匿名称を◎と称した。中央部では肉迫艇の意味を込めて◎と称していた。

昭和19年8月十ヶ戦隊の仮編成が小豆島船舶特別幹部候補生隊において完了、江田島町幸ノ浦、豊島における◎の訓練が開始された。ついで10月上旬下旬の間に第十一ノ第三十戦隊の編成を完結した。このほか、本土決戦準備のため更に第三十一戦隊から第四十戦隊まで及び第五十一、五十二戦隊が編成を完了して展開した。また第四十一乃至第五十戦隊および第五十三戦隊は仮編成のうえ訓練中に終戦を迎えた。

◎部隊運用の構想

絶対的な制空制海権下に進攻作戦を展開している米軍に対し攻撃必成を期するため、次の運用方針が定められた。

・現地の最高司令官

(通常軍司令官)が直轄して運用する。これは、一局部の戦況に幻惑されず、敵の上陸企図を的確に捕え、つとめて多くの攻撃艇を一斉に統一使用するためであった。とくに、初

回の使用時期の判断は、当該作戦軍のみならず全陸軍同種部隊の命運をも左右すると考えられた。

・企図の秘匿を絶対の要件とする

この着想は、陸軍にとり有史以来の新企図であり一たび敵に暴露すれば、この艇の脆弱さと自衛能力の不足から、容易に対応の処置を講じえられるものであった。これがため、国内における艇の製作装備はもとより、この種部隊の存在・配置・戦法等全般にわたり、企図を秘匿することが作戦成功の絶対的要件であった。基地の秘匿、援護の強化

◎部隊は、泊地に進入して来る敵輸送船もしくは軽艇艇を目標とした。

一方艇の航続力の制約から、部隊の展開は当然予想敵上陸正面付近に限定された。したがって徹底した敵の砲撃による制圧に耐えることが必要であり、このため基地の秘匿と掩護は絶対的なものであった。

・攻撃は、大量による奇襲とする

敵は通常膨大な戦力を投入して上陸を強行する。これに対し期待する効果をあげるためには、大兵力を投入し、かつあらゆる方向から同時に攻撃を行ない敵の対応を困難にする必要がある。また既にのべた艇の特性から、夜間における奇襲によることを必須の要件としていた。

・攻撃の要領

戦隊長の指揮のもと、軍の命令に基つき、日没後に舟艇を泛水し、一コ戦隊(百隻)または一コ中隊(三十)ごとに航行、敵の護衛又は警戒艦艇に遭遇した場合は、その一部をもって体当り攻撃を行わせ、主力の舟艇群をもって目標に突進、三ないし九隻が一団となって攻撃を実施する。

◎陸軍が行なった海上特攻

(米軍を震撼させた挺進爆雷艇◎)

昭和19年2月、米軍はマリアナ諸島・ニューギニア西部に進出、フィリピンはもはや目前に晒されていた。さらに、やがては沖繩侵攻も予測されるなど、戦局は日本にとってまことに憂慮すべき状況にあった。既に我が航空戦力の消耗ははなはだしく、敵の進撃を阻止するには、敵船団を上陸する前に撃破する以外になかった。同年8月陸軍海上挺進戦隊が結成され、訓練が開始されたのである。

その任務は、上陸準備のため泊地にある敵船艇に50キロの爆雷を装着したペニヤ製のモーターボートによって、夜間奇襲による肉迫攻撃を加え一艇をもって一船を屠ることであった。

結成された陸軍海上挺進戦隊は、隊長には陸軍士官学校51期・52期・53期・54期の若い少佐と大尉があたり、中隊長には陸軍士官学校57期を主体とした

中尉・少尉がその任に就いた。また群長(小隊長)には昭和18年12月に学徒出陣した船舶幹部候補生第10期・11期を主体とし、更に12期の見習士官及び各地の幹部候補生隊から採用された見習士官が任に就き、一般隊員としては船舶特別幹部候補生の当時16才から18才の少年兵が主として充たされた。戦闘の主力をなしたのは、この年若い少年兵たちであった。

全軍より選抜された、16才から25才の若き精鋭たちは昼夜を分かたぬ猛訓練の後、昭和19年10月、30コ戦隊の編成をもって、おのおの最後の決戦地、フィリピン・沖繩・台湾に展開を完了した。

これら陸軍海上挺進戦隊は国軍の大きな期待を担って、短期間に部隊を編成、不慣れな海上において無防備の特攻艇を操らなければならなかった。もちろん生還を期すことはできない。こうした不利な条件下で、敵船艇を撃沈すること数十隻という赫々たる戦果を上げたのだ。しかし、当時は隠密部隊として、まったく世に発表されないまま終わっている。

青春のすべてを抛って鬼神のごとき攻撃を敢行し、再び帰らざるもの一、六三六名の多きに及んだ。陸軍海上挺進戦隊の業績は、その家族と国を憂う純粋な心とともに、永く青史にとどめなければならぬ。

海上挺進第三戦隊の

最後の慰霊祭

戦友会長 皆本 義博

海上挺進第三戦隊は、五年ごとに沖繩の島で慰霊祭を行って来たが、戦友も概ね傘寿に及び、健康の障碍を訴える人も多く、終戦六十周年をくぎりとし、最後の慰霊祭を、慶良間の渡嘉敷島で実施した。

参加者は、ご遺族七名、戦友七名、物故戦友の婦人三名、戦友の家族及び縁者一三名計二〇名で、3月28日の午後一時から、懸念した朝来の雨も晴れ好天の下厳肅に実施された。



同日夜は、かつては戦場で、今は穏かな海浜の渡嘉志久マリンビーチホテルに、参加者全員が集り懇親会は、往時を語り盡きぬものがあったが、苦勞を俱にした村民男女老人達および若者まで更に加わり、手をとり合って語り又民謡等で、時のたつのを忘れた。参加者は、六〇年の歳月を越えた温かい友情の中にひたり、佳き友の情けをしみじみと感じた。

翌日は、港で殆んど村民の方の見送りをうけ、別れを惜しんだ戦友達は、島が見えなくなるまで、デッキに立ち竦んだ。

慰霊祭の祭文

春酣の今日、青い空、紺碧の海に包まれた濃緑もゆる静かな此処渡嘉敷の白玉之塔に、六〇年前この島で、皆様方とともに戦った我等戦友が、ご遺族、家族の方々とともに、沖縄護国神社神職加治順人様のご来臨を得、また渡嘉敷村小嶺安雄村長様はじめ島の方々のご臨席の下、ご英霊参拝のため集まって参りました。

あの戦いで尊くも散華された幾多の御霊に、私共一同衷心から敬仰の誠を捧げさせて戴きます。

顧みますれば、あの大战で祖国防衛の砦となった沖縄戦で、沖縄本島の戦いに先んじ、この渡嘉敷は戦場となりました。

来襲する敵艦艇に対し、側背からの特攻攻撃を任とする我が海上挺進第三戦隊とこれを支援する基地大隊とは、村当局・村民の方々の温かい友情とご支援とで、準備態勢をすすめて参りましたが、軍最高統帥は、19年末から20年一月にかけ、沖縄本島の第九師団を台湾へ転用させました。ために、基地大隊は一部を基地隊および整備中隊として残置し、主力は本島戦力強化のため独立混成旅団編入のため転出しました。このため、渡嘉敷の陸上戦力は、甚だ微弱なものとなり、また朝鮮半島

編成の水上勤務隊が配属されましたが、戦力は皆無でした。

島は、3月23日正午から敵艦載機の航空攻撃が始まり、25日には猛烈な艦砲射撃も開始され、一旦、戦隊は本島への転進を決意し準備に入りましたが、既に洋上は敵艦艇で覆われ、慶良間海峡も敵艦で封鎖されました。

そのとき、戦斗準備視察中の大町船船団長が隣の島から到着し、最後の決断をし、攻撃艇の自沈が発令されたために戦隊は戦斗のための火器なきまま陸上戦斗に臨むこととなりました。大町船船団長以下五名は洋上で戦死し、

忠勇無双の海上挺進戦隊同基地隊の勇士は、圧倒的敵火の下、対抗しうる武器もなく健斗を続けましたが、被害は絶大となり遂に復郭陣地へ後退の止むなきに到りました。

また一方、愛国の至情に燃ゆる村民の方々は、老若男女を問わず郷土渡嘉敷を敵の蹂躞から守るため、身を挺して戦い鬼神も泣かしむる健斗をされましたが、衆寡敵しがたく、島の一角に避難されました。敵砲火による攻撃は止まず、刻々と迫る危機に、生きて虜囚の辱めを受けずと二百数十余名の方々が自決して果てられました。

曾野綾子氏が、紀元73年・ローマ軍の猛攻撃をうけたユダヤの老若男女が、死海のほとりのマサダの要塞にたてこ

もり、民族の純潔を守るため九百余名の方々が自決し、その尊い行為は今日も世界史に燦然と輝いていることをのべられ、村にその書を寄託されました。皆様方の悲しくも尊い史実は、マサダの遺跡と同じく、いつ迄も輝いて残るものと考えます。

今や我が国は、平和に貫かれ、世界の中でリーダーとしての役割を果しております。当時の相手国米軍が、最も信頼し期待している日本の、その地位を皆様方の命を捧げての貴い行いが、その役割を築かれたと確信しています。

この渡嘉敷は、日本古来の順風美俗が脈々として残されている素晴らしい島です。私共は、かつてこの島で、若き日を皆様方のご友情の中で生きてきたことを最高の幸せと考えています。この島で果てられたご英霊に、この素晴らしい村にご加護を賜るよう祈念し、心からご英霊のとこしなえに御霊安かれとおいのり致し祭文といたします。

平成十六年三月二八日

陸軍海上挺進第三戦隊

戦友会長 皆本 義博

文芸欄

自衛隊イラク派遣部隊を送る
えりあしの青さ清しく瞳に痛し
日の丸を背に今し出で征く

川井 美保子



靖国神社みたま祭に参じ
ふるさとに迎え火もあり君がたま
忙しからむ今宵盂蘭盆
神々と心の通う夏の宵

ともし火ゆれてみたまうべなう

特攻隊員「トミ・ザイ」とは誰だったのか？

菅原 完

昭和20年（昭和20年）5月14日の朝、特攻機（爆戦）が九州南東海域において第58機動部隊司令官マーク・ミッチャー中将が座乗した米空母「エンタープライズ」に突入した。同艦の前方昇降機は130米上空に吹っ飛ばされ、飛行甲板は約1米浮き上がり、航空機の離発着が不可能になって空母としての機能を喪失したため、さしもの太平洋戦争を戦い抜いた唯一の空母も戦列から離れて米本土に回航することを余儀なくされた。

そして昇降機孔の底で発見された特攻隊員の遺体のポケットにあった名刺（複数）から、この特攻隊員はアメリカでは「Tomii Zai（トミ・ザイ）」と呼ばれてきた。「エンタープライズ」を戦闘からたたき出したこのトミ・ザイとは、一体誰だったのだろうか。

空母「エンタープライズ」

USS Enterprise (CV6)

「エンタープライズ」は、戦前（昭和17年）に建造され、太平洋戦争を戦い抜いた唯一の空母である。大戦中から Big E と呼ばれてきたこの空母は、

二十もの従軍記念星章を授与された「第二次世界大戦における最も武勲に輝く軍艦」である。また、大統領部隊感状と海軍部隊賞の両者を授与された唯一の艦艇でもある。元乗組員はいうに及ばず、その家族も Big E の乗組員であったことを大いに誇りとし、戦友会活動も活発に行われている。

注：CVは正規空母、6はアメリカ海軍6番目の空母を意味する。

「エンタープライズ」戦友会

筆者が「エンタープライズ」戦友会を知ったのは、昭和22年2月1日、マーシャル諸島に同艦を基幹とする第58機動部隊が来襲したとき、これに反撃して九六式陸攻による体当たりを試みた中井一夫大尉（兵学校63期）の最後の様子を知らるため、200年の春、当時の戦友会々長ノーマン・ザフト氏に連絡したことによる。翌年夏、同戦友会に新たに広報室が設けられたので、それ以来、ホームページ管理者のジョエル・シェパード氏（元乗組員の子息）とは緊密に連絡を取り合っている。今回の調査も、同氏の尽力なしでは完結しなかった。

トミ・ザイを知った経緯

中井大尉に関する貴重な資料の提供を受けたので、返礼に共著書「Encoun-

ter at Sea」をシェパード氏に贈ったところ、同氏は「エンタープライズ」に関心があればと言って「プロスタッフフォード著『The Big E』とスチーブ・ユーイング著『USS ENTERPRISE (CV-6) A Pictorial History』の二冊を送ってくれた。この中にトミ・ザイと呼ばれる特攻隊員の名前が出てくるので、

『The Big E』を調べたところ、この特攻隊員が「エンタープライズ」の攻撃した状況と、「彼のポケットに名刺が入っていた」ことがトミ・ザイに繋がったと判った。

早速、昭和20年5月14日の特攻による戦死者氏名を「連合艦隊布告」や特攻隊慰霊顕彰会などの資料から調べたが、トミ・ザイに該当する名前は見当たらなかった。強いて言えば、姓または名のいざれかが「トミ」である特攻隊員は富安俊助中尉であるが、それだけで特定することは、とても無理と思われた。

そこでシェパード氏に、名刺で名前を知ったのであれば、もう少しまともな名前があるのではと問い合わせると、彼の固有名は Shunusuka Tomiyasa（シユラスカ・トミヤサ）であり、マーク・トウエインの言葉を借りれば、真美が靴を履いている間に、誤りのトミ・ザイが世間を駆け巡ったものと思われるとの回答があった。特攻隊員の氏名がシユラスカ・

トミヤサであれば富安俊助中尉（東京出身、早稲田大学、第13期予備学生）と非常に似通っているの、かくかくの話がありますということをお知らせし、日本側の資料の収集をお願いした。

トミ・ザイ機の攻撃

（『The Big E』の要約）

昭和20年5月14日、九州南東約100哩の太平洋では、日出が5時15分であった。風は南寄り15節、海面は波立ち、上空には散在する雲底100米の積雲が流れていた。第58任務部隊の艦艇では総員が配置に就き、日本軍の偵察機に接触されながら、夜明けに海上を航行していた。6時10分、最初の敵機影が数個、レーダー上で南西方向に現れた。数分の間、グループや単機の機影が、略同一方向から接近してきた。在空中と要撃のため緊急発艦した戦闘哨戒機は、レーダーに誘導されて敵機に向かった。

敵機のグループは、戦闘哨戒機の執拗な攻撃を受けながらも、着々と「エンタープライズ」が所属する第三群と会合するコースで接近してきた。6時23分までに数機は20哩以内に入ってきた。6時53分、右舷5吋砲が、右舷正横から若干後方の5〜6哩離れた雲間から不意に飛び出した1機の零戦めがけて砲門を開いた。

搜索レーダーと方向探知機は、ほぼ20分前からこの零戦を追跡していたのである。他の艦艇もこの零戦に砲火を浴びせた。するとこの零戦は、レーダーで管制された5吋砲弾の炸裂による黒煙の列に追いつけられながら雲間に隠れた。この零戦は、数秒ごとに雲間から姿を現し、暫くの間「エンタープライズ」のコースと並行に2哩まで接近、4哩雲中に隠れ、3哩の地点で現れた。

6時56分、任務部隊は北西に向けて左に変針したので「エンタープライズ」の軸線は、この零戦が最後に入った雲の位置を通過した。あたかもこのチャンスを持ったかのごとく、この悪意に満ちた小さな戦闘機は雲底から現れ、「エンタープライズ」目掛けてまっしぐらに高速・緩降下を開始した。全機銃が銃火を浴びせかけて、この零戦を艦尾から追い払おうとした。しかし、特攻機はジグザグ運動により体をかわすこともなく、直進し続けた。全機銃と5吋砲4門が、左舷側が砲煙で黄色くなるほど、猛烈に射撃した。

この零戦が左舷後部上方から斜めに降下してきたとき、オーバーシュートして右舷に衝突するのように見えた。零戦の操縦士もそう思ったに違いない。なぜならば、彼は飛行甲板上方で、左に急横転して背面になり、反転したまま

降下角度を40〜50度に増加して前方昇降機のちょうど手前の飛行甲板に激突、昇降機孔の中を落下した。次の瞬間、爆弾は5層下方の甲板で大音響を上げて炸裂した。付近の艦艇からは「エンタープライズ」の前方昇降機が灰色と白色の濃い煙の柱頭となって、130米上空に舞い上がり、一瞬停止した後、海中に落下するのが見えた。

「エンタープライズ」は、格納庫の激しい火災と6米に達する破壊孔からの浸水により、手痛い被害を受けたが、火災は特攻機の突入から17分後には制御され、その13分後には鎮火した。また、一度は23米沈下した艦首も、懸命な排水により、36時間後には正常なツリムに復旧した。しかし、飛行甲板はゆがみ、昇降機の孔で裂け目ができ、もはや「エンタープライズ」からは、飛行機の離発着ができなくなった。

数日前、空母「バンカーヒル」から「エンタープライズ」に将旗を移したばかりのミッチャー提督は、翌15日、再び将旗を空母「ランドルフ」に移した。そして「エンタープライズ」は、ワシントン州のニュージレット・サウンド海軍工廠へ回航された。

日本側の資料

3月下旬、東京白鷗遺族会副会長・

野崎武治氏から、防衛庁防衛研究所戦史資料室において富安俊助中尉関連の戦闘詳報や戦闘行動調査などを捜したが、所蔵図書の中には発見できなかったとの返事をいただいた。

後日、野崎氏にお会いしたとき、白鷗遺族会の事務所で見つかったという昭和20年5月14日付「布告13戦闘経過概要」のコピーをいただいた。これが身元を特定する上で決め手の資料の一つになった。

米側の資料

シェバード氏とザフト氏から入手した米側の資料をまとめると、次のとおりである。

(1) 攻撃を受けた時刻とその地点
シェバード氏：「エンタープライズ」の「War Diary」によれば、6時57分となっている。8時の地点は北緯30度34.5分、東経132度50分（鹿屋の15度14分）である。

ザフト氏：7時頃と記憶している。戦友の誰かが九州から80哩と言ったが、ある著書によれば100哩となっている。

(2) 名刺、またはそのコピーの入手

シェバード氏：『The Big E』（スタックフォード著）のように、幾つかの著作が特攻隊員の遺体から名刺が発見されたとしている。この記事の出所、または名

刺の所在場所については不明であるが、油断なく気をつけておきたい。

ザフト氏：特攻隊員の認識票については、誰が持っていたのか、最終的に誰の所有になったのか、全く不明である。

(3) 遺体の取扱

シェバード氏：当方が見たことのある資料は『War Diary』だけであり、「14時10分、6時57分に突入した日本海軍中尉の遺体を水葬にした」となっている。特攻隊員は、簡単ではあるが尊敬をもって水葬されたと強く信じている。この件について、当時の乗組員から話を聞いたことがないので、儀式は短い控え目のものであったと思われる。

ザフト氏：記憶では、特攻隊員の遺体は、本艦の戦死者同様、マッドレス・カパーに入れ、5吋砲弾を付けて艦尾から水葬された。

(4) 日本語を解する者が乗組んでいたか

ザフト氏：乗組んでいたフィリピン人のコックに日本語を読めたかどうかは知らない。当方の推測であるが、特攻隊員の名前を聞いた誰かが上手に発音できなかったもので、トミヤスを短くトミ・ザイと言ったのではないか。その後の調査：この日（昭和20年6月19日）、マリアナ沖海戦当日）の日本側の攻撃中、米機動部隊の上空にあって、接触を保ちながら攻撃を指示していた日本偵察機が

あった。米旗艦「レキシントン」通信室はこの電波を受信して、二世士官がその日本語を逐一翻訳して日本側の攻撃方向をそのまま把握することに成功していた。(『連合艦隊・サイパン・レイテ海戦』福田幸弘、時事通信社P62)

沖繩戦当初、第58任務部隊指揮官、ミッチャー提督は「バンカーヒル」に座乗していたが、三日前の5月11日朝、旗艦「バンカーヒル」に第七昭和隊小川清少尉と他の一機の零戦が相次いで突入し、同艦は大損害のため、もはや旗艦として役立たなくなったので、ミッチャー提督は幕僚とともに将旗を「エンタープライズ」に移掲している。したがって前出の二世士官、またはその配置にあつた者が同艦にいて、名刺を読んだのではないかという推測が成り立つ。

日米の資料に基づく身元の特定

(布告113・War Diary)

1955年5月14日、鹿屋から出撃した第6筑波隊、第11建武隊、第8七生隊の機数は計21機である。また、階級別に見ると、中尉4名、少尉12名、下士官5名の計21名となっている。

(1) 『War Diary』によれば「14時10分日本海軍中尉の遺体を水葬にした」とあるので、少尉以下の階級者は、調査の対象から除外できる。

(2) 4名の中尉について『布告113戦闘経過概要』をみると、表のとおりである。
(3) 日裏、藤田両中尉は、「エンタープライズ」が被弾した6時57分以降に最後の打電をしているので、これも調査の対象から除外できる。

(4) したがって、残る2名の富安、楠本両中尉のうち、トミヤサと考えられるのは、富安中尉以外にないこと。突入地点は『War Diary』による「エンタープライズ」8時の時刻から推定すれば、日本側のいう「種子島東方」にあたること、さらに突入時刻6時57分は、発進時刻の約1時間30分であることから、上記の地点までの所要時間を勘案すれば、状況証拠ではあるがトミ・ザイと呼ばれて来た特攻隊員は、第721航空隊、戦闘第309飛行隊、第六筑波隊、富安俊助中尉(東京出身、早稲田大学、第13期予備学生)に、ほぼ間違いない。

隊名	機種・機数	官等・氏名	発進時刻	戦闘概要	戦果
第6筑波隊	戦爆18機	中尉富安俊助	05 30	消息ナシ	不明
第11建武隊	戦爆5機	中尉楠本三三夫	05 25	消息ナシ	不明
第8七生隊	戦爆3機	中尉藤田卓郎	05 25	08 10「敵艦隊見ユ」打電後消息なし	不明
		中尉日裏啓次郎	05 27	07 05「我空母に必中突入中」と打電後消息なし	突入戦果

運ってきた機体の破片
ザフト氏は1955年5月14日当日、4時から8時までの間、前方昇降機付近にある真水ボンブ室の当直に当たっていた。7時少し前、戦友のジョージ・ペーカーから「この方が安全に思われるので、俺はここにいる。当直を代わるから先に食事に行つて来い」と言われ、食堂で給食の列に並んでいたとき「総員配置に就け」が下令された。その直後に富安機が前方昇降機付近に突入し、戦友が身代わりになって戦死したという体験の持ち主である。この体験のため、永年、彼は日本人に対して必ずしも好感を持ってはいたとは思えない。しかし、両国の軍人はそれぞれの母国のために戦ったのだから、戦争から半世紀を経た現在、もう許し合うべきである。1955年当時の等級は、二等艦装兵で、建造、修

理分隊所属だったので、被害箇所修理をするために昇降機孔に降りていったとき、機体の破片を見つけて拾得した。また、戦友の一人がプロペラ・ブレードを拾ったので、厚さ約3吋に鋸で切ったものを貰った。この片面を磨いて1955年5月14日と彫ってある、と知らせてきた。関係者と協議の結果、しかるべき所に収めて富安中尉の忠霊・顕彰をしたので、できれば破片の一つを譲り受けたいとお願いしたところ、プロペラは生涯忘れられることの出来ない日付が刻んであるので手元に置いて将来は息子に譲りたいが、破片は自分の家族が持っているように、富安中尉の家族にお渡しした方が有意義と思う、と言って関係者の願いを快諾してくれた。破片は約4.5×9cmの小さいものではあるが、種々の経緯を経た後、58年ぶりに故国に還つて来て、関係者に感謝されたことは、筆者にとって望外の喜びである。

一遺族の富安秀雄氏は、この破片を富安俊助中尉が最後に発進したゆかりの地、鹿屋にある航空基地資料館において、展示を依頼し、現在の若い人たちに、当時の多くの若者が進んで国家に生命を捧げたことを知って欲しい。と同時に、戦争とはこのように悲惨なものであり、戦争が繰り返されることのない

ように、その実態を伝えることに役立てて欲しい、と話されている。

その説明には半世紀有余の昔、弱冠22歳の富安俊助中尉が、殉国の精神に燃え、外道の統率にしたがって十死零生の特攻作戦で米空母「エンタープライズ」に突入、散華した史実を伝えるとともに、富安機の突入により戦死した米側乗組員14名の氏名も列記される。

また、恩讐を超え、その特攻隊員が最後の瞬間まで操縦していた愛機の破片を快く返還してくれたノーマン・ザフト氏の善意に報いるため、その旨も付記されると伺っている。

最後に、本編を書くに当たって多大な協力を得た「エンタープライズ」戦友会のジョエル・シェバード氏の尽力に感謝の意を表したい。

株式会社草思社のご好意により「草思」2011年11月・12月号に掲載された拙稿「五十八年目の真実」を引用・要約させていただきました。以上

付記：

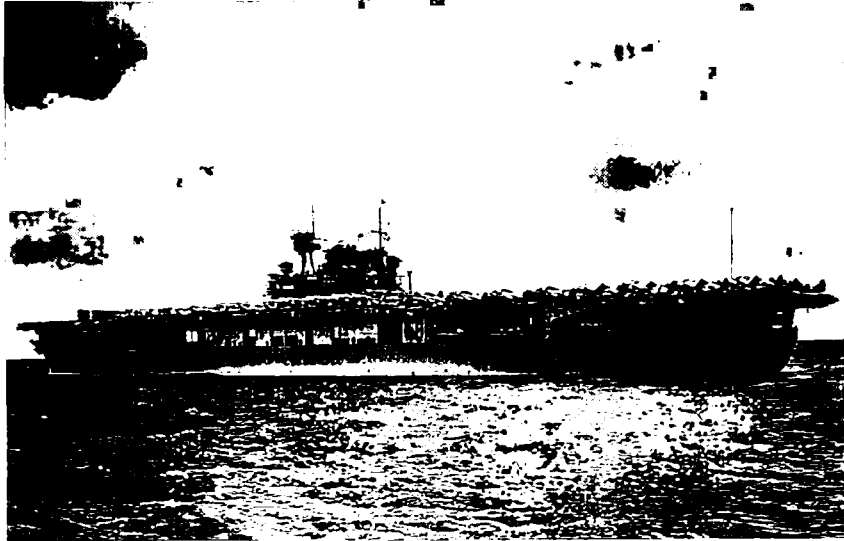
菅原 完（すがはら かん）

海軍兵学校第77期、戦後航空自衛隊

航空・軍事専門翻訳家

著書「日本陸軍便覧」「撃沈漂流」他

Photo # 80-G-13554 USS Enterprise en route to Pearl Harbor, October 1939



100メートル以上の高さにまで噴出した爆煙の頂上に爆風で吹き飛ばされたエレベーターが見える壮絶なシーン。3月18日と4月1日の特別攻撃に耐えた本艦も、この攻撃で、ついに戦列を離脱してビュージェット・サウンド工廠に回航を余儀なくされ、開戦以来の誇らしい戦歴にピリオドを打った。

ある特攻将校の生涯

—五六年目の墓参り—

前書き

特攻(或いは特別攻撃隊)とは、近々約六〇年前の第二次大戦中に生まれた必死人間爆弾攻撃のことをいうのだが、今や世間一般、特に若い層にとつては死語に近い。

この追悼記を書くのは、今後は決して二度と出現することのないような、この特異の死を遂げた若者が、わが身近にいたという個人的記録を残すともに、そしてそれ以上に、戦争を知らない次世代の人々にも、そんな個人を運命づけた国や郷土の時代背景があったことを忘れないでほしいとの願いからである。

一、特攻に死す

昭和二〇年八月九日一三時四三分、海軍中尉茨木松夫と上飛曹田中喜芳は千葉県木更津基地を、八〇〇キロ爆装した艦上攻撃機流星(七五二一五〇號)で飛び立った。六機編成の神風特別攻撃隊第七御楯隊第二次流星隊の一番機

として発進、金華山九〇度一〇〇渾に接近した米第三八機動部隊を捕捉、一四時五二分「我空母に体当たり攻撃す」を、続いて「我突中(公報

茨木 和典

のママ―入?)す」を打電、一四時五四分長符音は絶えた。戦後の米軍情報によれば、空母ワスプに肉薄中、直衛戦闘機と対空砲火の迎撃で同艦々首右舷側海面に墜落した模様である。添付した写真①は、その瞬間を撮ったものだというのが、その説明にあるように、基地出撃体制・時刻・距離・飛行速度・機種などを総合勘案して、まさしく亡兄たちの搭乗機であると、防衛庁戦史研究室では推定している。終戦わずか六日前のこと、私の次兄茨木中尉、海兵七三期卒。終戦の日に全軍に布告され、任海軍少佐、享年数え年二三歳であった。

二、遺された母の心

先年、高倉健主演の映画「ホテル」を見た。知覧特攻基地の「特攻おぼさん」と呼ばれた富屋旅館の女主人は、

ホテルになって帰って来た宮川軍曹を確かに見た。その知覧基地からの出撃は六日後には全面停止されたのを知っ

て、その老婆は「たった六日間が前途有為の若者の生死を分けたのだ」と悶え悲しんだ。

その日数の真否は知らぬが、奇しくも同じ六日間でわが子が鬼籍に振り分けられた事実を知った松夫の実の母ミチ(それは私の母でもあるが)は、さぞ辛かったであろう。戦後弔問に訪れた同じ航空隊の海兵同期生亀井英男氏(後、熊本商工会議所会頭、故人)は「高尾野町の風光に包まれた旧家の自宅では、母堂がお元気で、出撃時の君の写真を護っていられる」と書かれた。だが事実は終戦後の混乱期に届けられた、遺髪と爪のみがポツンと収められた「遺骨箱」を抱いて「松夫、松夫」と泣き、その後観音開きの墓を建て、その祭壇に写真を飾って拝み続けた。戦後でも大空襲下を相携えて逃げた二人の、数十センチの場所の差が生死を分けたという話を数多く聞くが、まさに戦争とは運命という名の、不公平、かつ悲惨さを生むものだと、嘆かざるを得ない。

三、茨木松夫の生い立ち

松夫は、特攻基地出水海軍航空隊に隣接する高尾野町上水流所在の、町立青年学校長茨木恒人と妻ミチの、一〇人兄弟の次男であった。家は三〇〇年

もそこに定住する郷土で、曾祖父は西南戦役時の薩軍の小隊長、祖父は小学校長で後の村長、という剛毅木訥の家風で育てられた。だが、少年時代は薩摩出水弁で言うヒッケジュモン(弱虫)の最たるもので、夜中当時屋外にあった便所に一人で行けず、室内に漏らすこともしばしばであったという。名前を聞かれるとただ「イバラキマツチャン」とのみ素っ気なく答え、手先もかなり不器用な少年であった。

しかし、急速に台頭して来た軍国主義の「時代の風」は小心・臆病の軟弱少年の存在を許さず、文学や芸術に特異の才能をもつ生徒は別として、ます普通の若者なら軍人志望に駆り立てられた。戦時中、陸幼から陸士へ進んだ筆者もその一人だった。尚武の国薩摩の教師はその風潮を奨励し、參禅の武人杉本五郎中佐の伝記なども刺激を与えた。教職にあって、皇国青年養成に心魂を傾注する父親恒人の後姿も無関係ではなかったろう。

四、青年時代の手紙

先日、茨木松夫の葉書約一〇通が、旧制出水中学校同級生の知友(旧制熊本高工卒)の家から発見された。旧制中学五年生時から海軍兵学校一学年時までの数通を、原文のまま、ここに取

り出してお見せしよう。

(1、昭和一五年八月、中学五年生時)

池田君、その後如何にして暮らしてゐるかね。元気でせうね。小生もまあ元気で。毎日毎日机にかじりついてゐます。然し思ふ通りにははかどらずにしょげかへつてばかりゐます。あの颯爽たる陸軍青年将校を思ふ時、小生は立つてもゐてもゐられない気持ちで一ぱいです。きつときつと猛烈に頑張つて陸士を突破する覚悟です。

二期期の始めには真蒼になって、君と會ふことでせう。小生としては、机に伏して死ぬならば本望です。やってやってみます。全く「人事ヲツクシテ天命ヲマツ」の心境です。君も一心にやってみることでせうね。お互にやれるだけやって五年一組の名をあげませう。然して松永先生に喜んでもらひませう。

(2、昭和一六年八月、浪人生、鹿兒島市より)

池田君、元気でゐられることと推察致します。夏休みには会ひに来ませず本当に失禮致しました。然し、小生が軍服を身につけてから、お互ひ面会しましたならば、又新たなる感慨もあら

うといふものです。長い様で短いのは夏休みですが、その夏休みをどんな風に御利用でしたか。共に勉強出来れば

此の上なはだつたんだが……。我等の親父をかこんで大いに昔を偲ばれたさうですが愉快だつたでせう。小生もその場所に一緒に居れたならなあ……士官学校も後二十日、やってやってみるよ、力の精限り。世の中は努力したものがどうしても勝つ様になつてゐるんだ。池田君お互ひ頑張らう。もう熊本に行つたられるだらうが……。葉書で失禮、さようなら。

(3、昭和一七年四月、海兵一学年時、江田島より)

池田君、御手紙有難く拝見。御元氣にて御奮斗との事何よりだ。小生も相不変元氣だ。扱て、二学年御進級御芽出度ふ。新人生は誰々だ。

君の手紙をよんで感じた事。一、職工さん大いに可なり、軍人も職工も報国には変りなし。何も軍人のみの忠ではない。一、餓死するといふ弱音は死んでも吐くな。それは米や食物は少いかも知れないが、苦しさは皆同じだ。頑張れ、貴君達の頑張りに感謝しない小生達ではない。

宛名を忘れた、学校の方へ出す。写

真は鶴首してまつぞ。又何れ書く。試験だ。さようなら。

日米開戦前後の旧制中学生の、軍学校進学の熱気が感じられるだろう。でも、上級学校へ進みたいというのが主眼で、何が何でも軍人になりたいというものはなく、親友と励ましあひ、かつ恩師に喜んで貰いたいという、純真な青年の気持ちが出ていよう。

五、現役将校の猛訓練

然し、この第三信からわずか三年半後には、(当初志望校の陸士でなかつたが)縁あって進んだ海軍兵学校を出たての青年将校として、本州東方洋上で散華した。この短い期間に彼の身上に何が起きたのか?

勇躍入校した海兵でのエリート教育は「至誠に悖る なかりしか」以下、有名な言行・氣力・努力・不精」の「五首」を目標に掲げ、悠久の大義に生きる殉皇愛国の精神を徹底的にたたき込んだ。

「あの橋まわれーば 生徒館が見ーえーるよー 赤い煉瓦にゃよーお 鬼が棲ーむよー」と唱つた修学期間も、戦局の緊迫に伴つて従來の四年から二年半に短縮され、昭和一九年三月には卒業して海軍少尉に任官した。

(後日、かつて亡兄と會つたこの地の、教育参考館に祀られている兄に詣でたとき、彼らの訓練基地であつた古鷹山

は、一向に変わりなき容姿を見せ、この年月の間に多くの人の生死があつたことを、微塵も感じさせなかつたが……) 航空要員となつた松夫は、多くの海兵同期生や予備学生と一緒に、霞ヶ浦・百里ヶ原航空隊で心身ともに猛訓練を受けた。海兵出身者としての意地は当然強かつたであらう。

第一信以來の五年間は、その精神改造の年月であつたのである。

六、特攻出撃の前に

昭和一九年、少尉に任官後帰省したある日の有様を、当時小学校低学年だった弟がよく覚えてゐる。墓参りに行くのに、いつものように同行しようとせがんだら、「来るなッ」と激しい口調で拒絶、数十分後の顔には赤みを帯びた目頭が感じられたという。特攻出撃を予期した最後の帰郷で、祖霊の前で号泣したのであつたらう。その前夜、父親と深夜までヒソヒソと話し込んでいたともいう。

また当時満州国官吏であつた長兄へは、出撃以前に長文の決別の手紙を送つてゐる。そこには、彼の短かくなるべき人生への思いが走馬灯の如く駆け巡つ

ていたに違いない。

祖先の靈に語り、唯一甘えられる兄に語る、その心中は察するにあまりある。しかし、彼は決然として征かねばならなかった。生粋の現役軍人の龜鑑として……

彼が家郷に送った遺書にはただ「本分に殉ずるは本望なり 天皇陛下萬歳」とのみあった。

生死を悩み苦しみ、そして最後は諦観して、笑って逝ったのではないか。

七、戦死者は蘇らず

教育者として、多数の青年を戦場へ送り込んだ父親は、終戦直後に自責の念に耐えられず、教職を退いた。その後推されて就任した町長の公的立場で、わが子松夫の戦死公報を受け取ったが、人前で取り乱すことも出来ぬままに、さぞ苦しかったであろう。そして、間もなく在職中に過労死したのである。

松夫やその父親のような、普通の人々にはどうにもならない、「その時代の空気」がある。そして、それを「我が運命」として死んで行かねばならぬことが多い。特攻、それは「死を決心する」のでなく、「必ず死んで他に尽くす」自裁行為である。その行為や結果には、怪拳とか犬死とか、後世人士の

冷徹な批判はあろうが、一身を犠牲にして恋人・家族・同胞など、己が愛する「他者」が住む「くに・さと」を護らんとする、愚直なまでの清冽な志と殉国の行動は敬愛されるべきではないか。

死者は蘇らず。遺族もまた悪夢は振り捨て、忘却したいと念じてても、年々記憶は蘇り、彼らにとっても生きていく限り、戦後は終わらないのである。

戦争が、いかなる非理非道をも産むこととは、今も昔も変わらない。戦争は痛みのみを生み育て、幸せになるものも誰もいない……

わが悼みを代弁する追悼歌数首を掲げる。人間の情愛はいつの世も変わらないと、しみじみ思う。

知覧特攻基地より出撃散華した恋人を偲ぶ老婦人小栗かえでの歌。

亡き人の 今はの際の 足跡を
遺し給いし 知覧恋しく

この空の 果てまでが君の 死出の途か
目の辺りにし 絶句して佇つ

源平の昔、海の濛屑と消えた恋人平
資盛を偲ぶ建礼門院右京大夫の歌。

ためしなき かかる別れに なほとまる
面影ばかり 身にそふぞ憂き

今や夢 むかしや夢と たどられて
いかに思へど うつととぞなき

八、半世紀後の墓参り

戦後も四五年ぐらい経ってから、定年退職した筆者は天草の牛深市にある海洋館を訪れた。そこで偶然に「巡洋艦長良記念室」の存在を知った。記念室設置の元となった地元作家島一春氏に、被弾轟沈した長良の諸英霊への哀悼の意を「特攻戦死者の弟」として書き送った。それを同氏が後援会々報に取り上げて掲載したのを、目に止めた人が長良遭難者救助に活躍した旧海軍航空隊員牛島正信氏であった。同氏が筆者に連絡を下さり、松夫の出撃状況を教え、さらに同乗出撃した田中上飛曹の遺族の連絡先をも親切に探して下さった。こうして、念願だった次兄松夫の特攻機同乗者田中喜芳氏の墓参りが、終戦後五六年目の一昨年一〇月にようやく叶ったのである。

ておいでだ。そして、喜芳氏より三歳年下の姉上福岡まさ子さんとともに、私と家内の来訪を心から喜んで下さった。田中さんがたも私共も、ともに初対面とは思えない親近感で、あたかも昨日のこのように、戦死者の思い出を語り合ったのである。

喜芳氏と年の近かったまさ子さんは当時の状況をよく覚えており、出撃前何遍も行つては帰ってくる組だったんだが、今度はどうしても死なないかな」と言ったこと、戦死通知後に祖母が「夜の火を消しておけば、喜芳が帰ってくる」と言って暗闇にいたこと、父親が戦死状況を聞きに来た人々に怒りまくっていたことなどを切々と語られた。

小高い丘の上の戦死者墓地と、集落墓地と両方に墓があった。手を合わせ

て、「どうか、私の兄松夫と一緒に安らかにやすみ下さい」と祈った。

田中妹弟も私たちも、ともに半世紀間の重荷が、少しは下りた気がして、その後ご案内戴いた善通寺には清々しくお参りできた。

この有縁に、今はただ感謝あるのみである。

従兄弟の田中敏雄氏の位牌を丁寧に護つ

た。



写真説明
 ①特攻機突入の瞬間(写真集「カミカゼ」(下)、二三六頁所載)。
 ②五六年ぶりの墓参。仏壇前にて、左より筆者・同妻芳子・田中勝氏・福崎マサ子さん・田中夫人。

20年8月9日の戦闘

場所：金華山東方

戦闘の状況：高速空母機動部隊(第3艦隊)に対する特別攻撃

日本側の攻撃部隊：海軍：神風特別攻撃隊第四御盾隊、第四御盾隊第二次流星隊

連合国艦船の被害：大損傷；米駆逐艦ボリー

空母 ワस्प WASP CV-18

14時55分、金華山東方130浬付近で北日本の基地と船隻を攻撃していた第3艦隊の空母ワस्पに肉薄中、直衛戦闘機と対空砲火の迎撃を受けて墜落する流星艦攻と思われる機体。当日、27機の特攻機が米機動部隊に殺到したが、米国側は艦隊上空で、この他に7機を撃墜したと報告している。注、当日、百里ヶ原基地から①第4御盾隊(特基艦隊15機)②木更津基地から第4御盾隊第2次流星隊(流星艦攻12機)が出撃したが、関東地区から攻撃地点までの距離が約500キロであることを勘案すると、この写真に見えるのは13時43分に基地を発進した②の第1波と見なすのが妥当であろう。



ワस्पの艦首右舷側海面に墜落した特攻機が大きい飛沫を上げ、手前をフレッチャー級の直衛駆逐艦2隻が航行している。特攻隊の強敵だった米高速空母機動部隊に対する攻撃シーンを捉えた最後のこの映像は、ついに堅陣を破砕出来なかったカミカゼの悲運を象徴するかのようである。

無名勇士之墓

もう一つの特攻

今井五十二



(三重県明野)の楡与平大尉(当時)は所属する最新鋭の五式戦闘機13機を指揮して出動し、鈴鹿上空で南下するB-29の大編隊を捕捉し、果敢に攻撃を加えた。訓練通り2機づつ連撃し前方及び、下方より反復攻撃を加え、5機を撃墜、6機を撃破する大戦果をあげた。なお海上に脱出を図る1機を追撃した2機の五式戦は、紀伊長島町田子浦西方海上で、被弾乍ら体当りこれを撃墜し、自らも落下傘で脱出した。

58年ぶりの身元判明

平成14年11月28日、地元伊勢新聞は無名勇士之墓について記事掲載し、戦後半世紀を経て町民による供養が続けられ、香華の絶えることが無いと報じた。(北村博司記者、紀伊長島町駐在)。偶々この記事を読んだ津市在住の雲井保夫さん(英語塾経営、戦史研究家)は、予てよりB-29の日本爆撃と防空戦について研究、著書も多く自らの研究から、2名の無名勇士は楡阿部二郎及日比重親両少尉(当時)の間違い無いと思ひ、念のため米國の日本爆撃に関する記録を詳細に調査を進め、昭和20年6月5日、紀伊半島南沖合で日本軍戦闘機の攻撃を受け、体当りにより撃墜されたB-29の生き残り兵士の証言を入手した。

び尾翼部分に複数の戦闘機が衝突した。乗機は錐揉み状態になり海面に墜落した。11人の乗員の中4人の兵士が脱出、携帯ゴムボートで漂流中、米軍潜水艦により救出されたという。

この証言記録は、地元町民の目撃談及楡隊長の戦闘記録、遺言等の内容とも合致しており、同隊の阿部二郎、日比重親両少尉(当時)の体当り攻撃に間違いなく、無名勇士の身元は58年ぶりに判明することとなった。

雲井さんは調査結果を故楡少佐未亡人宣子さん、伊勢新聞記者北村博司さんに伝えると共に、故阿部二郎、日比重親両中尉の遺族にも連絡した。

三重県南端熊野灘に面した、漁港の町紀伊長島町は人口一万余、熊野古道に沿った歴史の町である。町の戦没者を顕彰する忠魂碑は、町の規模に比し大きく立派であり、毎年町と遺族会により慰霊行事が営まれている。

無名勇士之墓は町役場に近い町営墓地の一角にあり、建立以来約半世紀を経て香華の絶えることが無いという。

建立の由来

大東亜戦争末期、日毎に空襲が激しくなっていた昭和20年6月5日、サイパン基地を発進した約30機のB-29爆撃機の大編隊は、神戸、西宮を中心に爆撃し、機首を東南に向け熊野灘方面に退避しつつあった。明野教導師団

飛行服のみで身元を確認することが出来ず、近くの潮岬駐留の海軍に問い合わせたが、該当者なしとのことで、同町遺族会の方々が中心となって協議し、久野墓地(現町営墓地)に埋葬した。昭和27年に同町西町の石材業山口茂さんが石材を寄贈し、改めて無名勇士之墓が建立された。同墓は紀伊長島町の遺族会の方々により維持管理され、(故)脇彦三郎さん及妹としさんが中心となって、毎年6月5日命日の法要と日常の供養が続けられてきた。又多く的一般町民も夫々の墓参に併せて、

線香をあげ、花を手向け今日迄香華の絶えることが無かった。



日比中尉



阿部中尉



遺族を招いての合同慰霊法要

平成15年6月5日の命日、紀伊長島町の遺族会は、58年ぶりに身元の判明した両中尉の遺族を招き、改めて墓前で慰霊法要が営まれた。両家共既に両親は他界されており、阿部中尉の甥昭男さん、日比中尉の姉半井孝子さん等親族8人が出席し、町からは奥山始郎町長、大西房夫遺族会長を始め多数の関係町民が出席した。以下両勇士の身元判明のきっかけとなった、北村博司記者の報じた慰霊祭翌日6月6日付の伊勢新聞の記事の一部を再掲する。

「読経の後、町民を代表し奥山始郎

町長が自作の短歌「迎え撃つ 若き少尉の空中戦 勇士の闘魂誰そ忘れむ」を披露、「戦争は絶対いけない」と追悼の言葉を述べた。慰霊法要には遺体を収容した東正巳さん(72)や、石材を無償で提供して墓の建立に盡力された山口茂さん(74)ら多くの地元関係者も列席し、花束を捧げ半世紀をこえて漸く兄弟、親族にめぐり合った両中尉の冥福を祈った。

日比中尉の姉半井孝子さんは「おとなしい弟でしたが、軍人一家に生れ(父重遠氏陸士13期、日露戦争28高地攻撃戦に参戦負傷、兄同49期陸大卒後、航空事故で殉職)陸軍士官学校に進みパイロットになりました。やはり飛行機が好きだったんでせう」と話した。

また、両中尉の所属した、明野教導飛行師団第11戦隊の直屬上官だった故榎与平少佐の未亡人宣子さんから、花束と共に送られた弔辞が読みあげられた。「お二人の所在が判明し、早速佛前に報告しましたが、夫もさぞかし安堵し喜んでいることと思います。58年ぶりに親族の元へ帰られたお二人が、御先祖様と共に安らかに眠り下さい」と改めて冥福を祈った。遺族等は関係者の厚意に繰返し感謝の意を表し、骨壺などに墓の土を納め持ち帰った。

(付) 榎与平少佐遺言(原文のまま)
大東亜戦争で生死を共にと誓った戦

友は殆んど戦死し、我のみ残る身となつたが、加藤建夫戦隊長はじめ八田米作大尉等多くの人々は今尚南海の海の底深く眠り続けられて居り痛惜の極みであるが、終戦の年6月5日B-29との空中戦で部下の阿部司郎少尉と日比重親少尉の両名を熊野灘で失い又同年7月16日P-51との戦闘で部下の鈴木甫造大尉を伊勢湾で戦死させ未だ海底に在ると思えば胸の張り裂ける思いである。よって我死亡の節は身内のみでつましく埋葬下さる様堅く御願ひする。

平成元年六月四日

「榎与平少佐遺言」

陸士53期、大東亜戦争初期、加藤建



戦闘隊で活躍、数々の武功をたてたが右足に被弾切斷、以降義足での操縦に挑戦し戦列に復帰、明野第11飛行隊長として新鋭5式戦隊を指揮、本土防衛の数々の迎撃戦に参加。

両中尉の銘板(石碑)の建立

平成15年10月20日、紀伊長島町遺族会大西房夫会長(当時)は、身元の判明した阿部、日比両中尉の氏名と、無名勇士之墓建立の経緯を記した石碑を墓と並べて新たに建立し、除幕式を行った。遺族3人と奥山始郎町長、平野倅規町議会議長及同町遺族会関係者が出席した。故日比重親中尉の弟重昭さんは「兄は戦死の一ヶ月前に東京の実家を訪れた。帰任した後、自宅の上空を旋回する爆音を聞いたが、お別れに来たようでした。」と飛行服姿の遺影を見せ乍ら思い話を話し、お墓を香華を絶やさず守り続けてきた町民の厚意に礼を述べた。尚石碑は両遺族から同町遺族会に贈られた寄金をもとにして、再び同町西町の石材業山口茂さんの協力で建てられた。(伊勢新聞10月21日の記事―北村博司記者―による)

無名勇士の墓に応える会

平成15年8月、日比重親中尉の令弟

重昭さんより、6月6日付伊勢新聞の「58年ぶりの身元判明」の記事と前日命日に行はれた法要の経緯を記した手紙が陸士第57期同期生会に送られてきた。その内容は同期生会幹事会で報告され、衝撃的な感動と深い感銘を与えた。早速岡中尉と陸士左任在中親父のあった同期生及卒業後航空部隊での同期生戦友の有志により、「無名勇士の墓に應える会」を発足させた。應える会は先づ5人の世話人を選出、(代表 今井五十二 同期生会副代表 遺族と連絡をとり乍ら、活動方針を策定した。その内容は次の趣意書の通りである。

“無名勇士の墓に應える会趣意書”

平成15年6月5日、紀伊長島町に於て故阿部司郎、日比重親両中尉と判明した無名勇士之墓前で、地元の関係各位と、招きを受けた両中尉の遺族により、鎮魂の法要が行はれたとの新聞報道が遺族から知らされて、陸士第57期同期生に大きな衝撃と感動を与えました。

同期生の約1/3の11名が戦死した先の大戦で、苦難を越えて生還した私達は、戦後復興に夫々の立場で全力をあげると共に、戦友の慰霊を生涯の事業として、5年毎の靖国神社参拝全国大会を始めとして、近年は中国、台湾、南方諸国、沖縄の戦跡を訪ね、慰霊巡拝を続けてきました。戦死者の中には

多くの遺体未収容者(特攻110名を含む)があります。その中でこの度の三重県紀伊長島町の出来事は、祖国日本の人々の愛国心と戦死者への慰霊の真心が、純粋な形で発揮されたものであり、深い感動を覚えると共に深く感謝申し上げます。陸士第57期同期生幹事会は協議の上、阿部、日比両君と陸士予科、本科及明野飛行隊の生存者が中心となり、次のような対応を進めることにしました。

- 1、紀伊長島町無名勇士之墓参拝
- 2、関係各位への御礼の表敬訪問
- 3、遺族会に感謝金贈呈



4、一連の経緯を借行社機関誌「借行」に寄稿
これらの行動はすべてご遺族と相談し乍ら進める。以上

紀伊長島町への表敬訪問と法要

平成16年2月29日、應える会世話人3名(今井、児島千海、小林宇三郎)及地元三重県前田恒夫君は現地に赴き奥山始郎町長、北村博司遺族会々長を表敬訪問すると共に、両中尉の氏名の入った石碑を新たに建立した、無名勇士之墓前で追悼法要を営み、感謝の言葉を申し上げ、感謝金を贈呈した。北村遺族会々長より、感謝金は遺族会基金に繰入れた上、追悼式等の機会に地元中学生を対象に平和をテーマに作文を募集し優秀作品の表彰等に当てたいとの知らせがあった。

後記

陸士第57期生会は昭和19年、苛烈な大戦末期に参戦、戦死者は特攻110名を含め11名にのぼる。戦後同期生会の活動の中心は、一貫して戦没者の慰霊であった。5年毎の遺族を招いて行う、靖国神社昇殿参拝全国同期生大会を始めとして、東京、杉並の善福寺には戦没同期生の供養塔(清浄光塔)を建立、毎年11月に慰霊祭を営んでいる。又大

陸、南方各地の戦跡の慰霊巡拝も重ねてきた。特攻戦没者の慰霊も靖国神社、世田谷平和観音、九州の知覧、都城、万世の追悼式にも毎年代表を送り、多くの同期生が参拝している。

無名勇士之墓の阿部、日比両中尉の戦死公報では、単に行方不明となっているが、今回の調査でB-29と激闘の末、体当たり攻撃での戦死が確認されている。

無名勇士の墓に應える会に寄せられた書簡で、日比重昭さん(重親中尉の令弟)は次のように率直な気持ちを述べている。(原文のまま)

終戦後、靖国神社へは命日の度、母が御祈りしておりました。後を継ぎ東京にいたときは、お参りを私が引き継ぎましたが、鳥居を出たとき感じたことは、兄は犬死したのではないかとの錯覚をおこしておりました。が決して犬死ではないとの確信を持ち続けておられるようになりました。この度皆々様の御厚情により、現世に戦死の状況をご披露していただき、功績を讃えていたゞけたことは、幸運な兄であり、兄に代わり厚く御礼申し上げます。“無名勇士”の功績は、もう一つの特攻として永久に讃えられ、語り継がれるものと信じております。

陸士第57期無名勇士の墓に應える会
世話人代表 今井五十二記

第二艦隊追悼式参列の記

岩下 邦雄

私はこの度枕崎市「火之神公園」に建立されている「平和祈念展望台」で挙行された「第二艦隊追悼式」に瀬島会長代理として参列して来ました。本文に入る前に上記「平和祈念展望台」について若干説明致します。

この「展望台」は当時枕崎市商工会議所会頭であった岩田 三千年氏が中心となり、第二艦隊の壮挙を後世に語り継ぎ、あわせて吾が国の平和を祈念する目的で、戦艦大和等の沈没地点の至近距離にある枕崎市に、終戦五十周年に当たる平成7年に完成されました。此処は、はるかに東シナ海が見え、景勝の地で、境内には大和等の祈念碑や平和のシンボル女神の像などが安置され、参道両側には沈没艦の遺族や乗組員等が寄贈した約八十基の石灯笼が立ち並んでいます。国内で最も整備された見事な設備と申しても過言ではありません。全国規模の慰霊祭を一時自由参拝に切り替えましたが、多くの人々の強い要望で、本年から一般の市民も参加し易い追悼式にして再発足したところ、遺族八十八名と旧海軍関係者や一般市民が数百人参加され、往時

を凌ぐ盛況となりました。式典は軍艦旗掲揚で開始され、奉賛会会長の挨拶のあと私が瀬島会長の「追悼の辞」を代読しました。続いて大和乗組みの弟さんを亡くされた方が、遺族を代表して切々たる哀悼の言葉を述べられ、参会者一同は深い感動に包まれました。其のあと自衛隊國分音楽部と地元の「マリンコーラス」の碑前演奏があり、最後に参会者全員が献花して無事終了されました。

毎年この事ながら今年も快晴に恵まれ、時恰も桜花爛漫の美しい風景の中で、誠に心のこもった感動的な追悼式でした。このような立派な式典が十年以上に亘って挙行されている事に対し、主催者並びに枕崎市民の皆さんに対し、満腔の敬意を捧げつつ、追悼式参列の報告を終わります。

「追悼の辞」

謹んで第二艦隊の勇士の御魂に対し追悼の言葉を申し上げます。

貴方がたは昭和二十年四月七日この枕崎市の西方二〇〇キロメートルの海上において米攻撃機延べ三九〇機と交戦し、二時間に亘る死闘の後伊藤艦隊

司令長官以下三千七百二十一名が水漬く屍となられて、今もなお三百四十メートルの海底に眠っておられます。

その七日前に米軍は沖繩本島に上陸作戦を開始しました。吾が陸海の将兵は主として航空機による体当たり総攻撃を行い、米軍はその為一時は後退を迫られるような情勢になりつつありました。この好機を捕らえて戦艦大和以下十隻の艦艇からなる第二艦隊は沖繩本島に逆上陸し、熾烈なる砲撃によって米軍を追い落とす目的で決死の出撃を決定したのですが、優勢な米軍の攻撃の前に遂には力尽きて壮烈なる戦死を遂げられました。物量吾に数倍する連合軍に対抗し、正に矢尽き刀折れて終戦を迎えたのは貴方がたの壮挙の五ヶ月後でした。

戦後わが国は皆様の祖国再興の意思を受けついで驚異的な経済復興を遂げましたが、同時にわが国古来の精神美と云う最も大切なものが失われました事は、皆様の崇高な愛国心を思うとき誠に申し訳ない事でありませぬ。

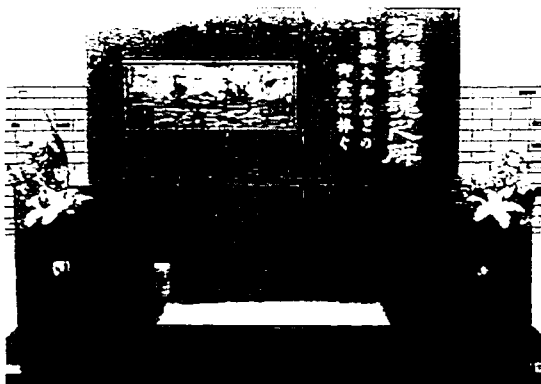
然しながら最近わが国はイラクその他の諸國の人道復興支援のために、陸海空の自衛隊が外国に向けて派遣すると言ふ大きな変化を示しております。自衛隊の皆さんの凛々しい振る舞いと任務遂行の燃える眼差しを見る時、

祖国防衛に身を捧げられた貴方がたの気高いお姿が思い出されてなりません。何卒皆様がお力をかして下され、派遣された自衛隊員が任務を果して、全員無事に帰還出来ますようにお守り下さい。

ここに冥福を心よりお祈り申し上げて追悼の言葉といたします。
平成十六年四月七日
特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会
会長 瀬島 龍三

殉難鎮魂之碑

所在地 鹿児島県枕崎市火之神公園
建立 平成五年四月
管理者 枕崎商工会議所内
平和祈念展望台事業奉賛会



特別攻撃に逝ける同期の戦友を悼む

本田 巽

私は昭和十八年の夏に第十三期海軍飛行専修豫備学生を志願して、その一員となりました。昭和十八年九月十三日、土浦空と三重空に二分して入隊した同期生のうち、同年九月三十日、正式に第十三期海軍飛行専修豫備学生に任命された者の、総数は五一九九名でありました。

其の後、基礎教育終了時に実施された適性検査の結果、同期生の爾後の進路は操縦、偵察、飛行要務、の三部門に選別せられ、夫々に必要な専修教育を受け、昭和十九年二月から九月までの間に最終教程を卒業して、飛行科豫備士官となった者の総数は四八五五名でありました。

十三期同期生が教育期間終了後に配属された地域と職務内容は、広範で多岐、多様でありましたが、当時既に戦局は大きく傾き日本の敗色は覆う可くもない情勢でありました。そのような戦況の下、太平洋戦争の末期二ヶ年足らずの間に、同期生総数の約三分の一に当る一六一六名が戦没(戦死及び殉職)致しました。同期生の戦死者のうち特別攻撃に依る戦死者数は四四八名

で、海軍航空隊に於て特攻戦死した士官

搭乗員総数七九〇名の約五七%に当ります。

十三期同期生の特攻戦死は、昭和十九年十月二十六日、比島戦線に於ける神風特別攻撃隊に始まり、其の後特攻作戦の常套化に伴い爾後の太平洋戦争の殆んどすべての戦場に拡大されて行きました。最大の犠牲者が集中したのは昭和二十年三月以降の南西諸島方面、特に沖縄決戦でありました。

十三期の同期生は皆同じ志を抱いて敢えて死の危険度の高い海軍航空隊の搭乗員を志願したのでありますが、既述の通り入隊後二カ年足らずの間に同期生の約三分の一が戦没し、約三分の二は生き永らえると言う結果になり、その運命は大きく分かれてしまいました。私も海軍航空隊の実戦部隊の搭乗員の一員として、短い期間ながら搭乗員の運命の苛酷さを身を以って体験致しましたが、私はたまたま本土防空の為のB29に対する邀撃戦を、主任務とする夜戦月光の搭乗員と言う配置に着いて居た為に、特攻隊には編入されませんでした(私の推察)し、又度重なる邀撃戦攻撃にも拘らず不思議の生還を果しました。海軍時代の体験を通じ

て私が痛感したことは、人間には一人々々夫々定まった運命があり、人の生死と言う重大事は人智、人力を超越した或る大きなもの、見えざる手によって操られて居るのだと思はざるを得ないと言う事でありました。

しかしそれにも拘らず、同期生のうちの彼は死に我は生き永らえたと言う現実を前にしては、同期の戦没者とり分け特攻戦死者に対しては、生き永らえた者の一員として追悼の念と同時に負い目と言うか、自責の念と言うべきか、そのような説明し難い複雑な思いを併せ持たずには居れないのであります。

特別攻撃は誠に異常且つ非情な作戦でありましたが、当時の戦局が通常の戦法を以ってしては最早挽回不可能な状況に陥って居たことや、私もその一員であった航空隊の搭乗員の大多数が「自分達が身を挺して祖国防衛の先頭に立つ以外に此の國を救う道はないのだ」と言うひたむきな精神状態に在ったことを知るが故に、特攻作戦の当否、是非善悪については未だに単純明快には断定し切れない思いが致します。

しかしながら止むに止まれぬ作戦であつたとしても、余りにも多くの若い命が大空に散って行き熱い血潮が流されました。私は特攻と言う未曾有の戦

法に思いが到る度に、「回天の業を成すは我にあり」と耻を決して敵艦に突入したであらう戦友を憶い、溢れる涙を押え兼ねて白日爲に光を失うかと思ふばかりであります。

若くして特攻に殉じた同期の戦友達も、いざとなれば人間である以上、様々な苦悩や迷い、執着心等が生じたに相違ありません。それを克服して特攻と言ふ形で自己の生を完結させるために、彼等が揺れ動く精神状態の中に在って最後まで如何に苦闘したであらうかと言うことを推し量り、更に遺された御遺族の方々の御心情に思いを致すとき、私は語るべき言葉を失い、凜然として首を垂れる外はなく、生き永らえた同期生の一員として自責の念に似た思いから逃れることは出来ないものであります。

短歌

(特別攻撃に逝ける同期の戦友を悼む)

(十三期同期生の名簿が

呼び起す思い)

沖縄に特攻戦死せる戦友數多
名簿を繰りて見入る術なき

沖縄を指して南へ急ぎたる

數多の戦友等還り來ざりき

南の海原遠く翔け行きて還り來ざりし
戦友等幾人

沖繩の特攻に逝きし戦友數多
海原翔けしその生命はも

沖繩に特別攻撃相次ぎて
戦友等逝きたり春闌けし頃

戦死者の名簿を繰れば貴様俺
呼び合ひしかの戦友が思ほゆ

戦死者の名簿に相次ぐ特攻の
文字に息衝く永らえしわれ

特攻の二文字相次ぐ由々しさに
読み継ぎ難く名簿伏せたり

(國分基地を發進、

沖繩に突入せる戦友を憶つ)

ふたたびは還ることなき基地に立ち
霧島の山仰ぎ見にけむ

開闢岳を過ぎて洋上に出でし後
ふたたび見返ることなかりけむ

琉球孤島傳い行く航海路

海上の道と呼びし人あり

(海上の道：民俗学者、柳田國男氏の
著作中の有名な論説)

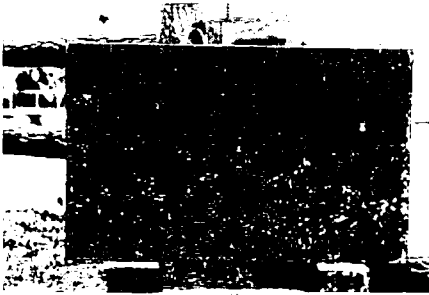
海上の道とう呼び名宜なりと
遙かに思うその海の色

琉球孤連なる海と島影に
針路求めて戦友等往きけむ

海上の道と呼ばれし南海を
戦友等往きしまま復路なかりき

突入を告ぐる無電の長符音
息詰めて聴くその幽きを

突入を告げ来る無電はたと絶え
後の静寂の術も術なき



國分特攻基地の碑

特攻に逝きたる戦友等機上にて
今わの際に何と喚びけん

碎け散る今わの際に聲上げて
戦友等その母を喚びにけらざるや

特攻に逝きたる戦友はいやはてに
母を喚びけん息の限りを

敵空母に一機命中と傳え来る
無電の語句は由々しからずや

敵空母に一機命中したるとき
夕日は紅く翼染めたり

(事志と違ひ回天の業遂に成らず)

回天の機を希い沖繩へ
急ぎし戦友等悲しからずや

(回天：時勢を一変すること。哀えた
勢を盛り返すこと。機：物事の起るきっ
かけ。時機。)

自ずから知る人あらむ後の世を
待みて戦友等逝きにけむかも

(光陰矢の如く戦い終りて
既に五十有余年)

若くして空に逝きたる戦友數多
永らえしわれ老い増しにけり

戦死者の名簿を伏せて思い見る
在りし日の戦友若かりしかな

眉秀で眼輝く若武者か
生けるが如し戦友の遺影は

色褪せし亡友の遺影を今日見れば
面輪は鬚の薄き親しき

面影に立ち来る亡友は若くして
われは老いつつ時移り行く

ゆくりなく鏡に向かえばわが姿
いよ老いさび夏は逝くなり

亡き戦友の面影常に若くして
われは術なき老いを嘆かう

(同期生の戦死者相次ぎし
当時の己を省みて)

人も機も諸共碎け散り行くを
淨しとせしは若き日のわれ

兵われも人の子故に時に困り
怯懦の心止めかねつも

ある特攻戦没者とその弟

本田 巽

と面識を得る機会に
 恵まれて、爾來
 毎年谷川隆夫大尉の
 墓参をさせて頂いた
 遠く来て薩摩の國に兄と弟の
 深き縁を思ひ染むなり

海軍大尉、故谷川隆夫兄は、私にとりまして海軍に於ける同期生の一員であります。谷川大尉は島根県松江市出身、明治大学卒業後、第十三期海軍飛行専修豫備学生を志願し、三重海軍航空隊、美保海軍航空隊、名古屋海軍航空隊、第二〇海軍航空隊を経て、第六〇海軍航空隊、攻撃第一飛行隊所属の艦上爆撃機彗星の操縦員として、昭和二十年四月七日、鹿児島國分基地を發進、南西諸島に於て米機動部隊に突入、特攻戦死されました。

私は愛知県、明治基地所在の第二一〇海軍航空隊の夜間戦闘機月光隊に所属して居りました昭和二十年二月頃、同隊内の士官宿舎で谷川隆夫少尉(當時の階級)に一度だけお会いした記憶があります。

松江市在住の谷川芳明氏は右記谷川隆夫大尉の御令弟であります。私は十數年以前より毎年十一月初旬に松江護國神社に於て開催されます白鷗遺族會(海軍飛行科豫備学生、生徒出身の戦没者の御遺族と生存者で結成した組織)山陰支部の慰靈祭に参加して居ります

が、數年前その席上に於て谷川芳明氏

り、故人に関する各種の資料を送付して頂く間柄になりました。

谷川芳明氏の御令兄隆夫大尉に対する敬慕の念は誠に深厚なるものでありまして、兄の最後の出撃地、鹿児島國分基地跡に於て、毎年四月に開催されます「國分基地發進戦没者慰靈祭」の中心的存在として、その遺族会の運営に熱意を傾けて居られます。

一昨年谷川芳明氏より「毎年四月國分基地跡に於ける慰靈祭終了後、薩摩半島の最南端、長崎鼻まで足を延ばして、そこから南へ広がる海原を眺めて、この海の彼方に逝った亡兄を偲ぶことを心の慰めとして居ります」とのことをお便りを頂いたことを思い出しまして、兼てより芳明氏の亡兄に対する敬慕の念の深さに感銘を受けて居りました私は、昨年の谷川大尉の御命日(四月七日)を前にして、平成十年四月五日付で、故人に対する追悼のため、芳明氏が長崎鼻に立たれた時の感慨を推し測りまして別紙の如き拙作を芳明氏宛郵送しに及んだ次第であります。

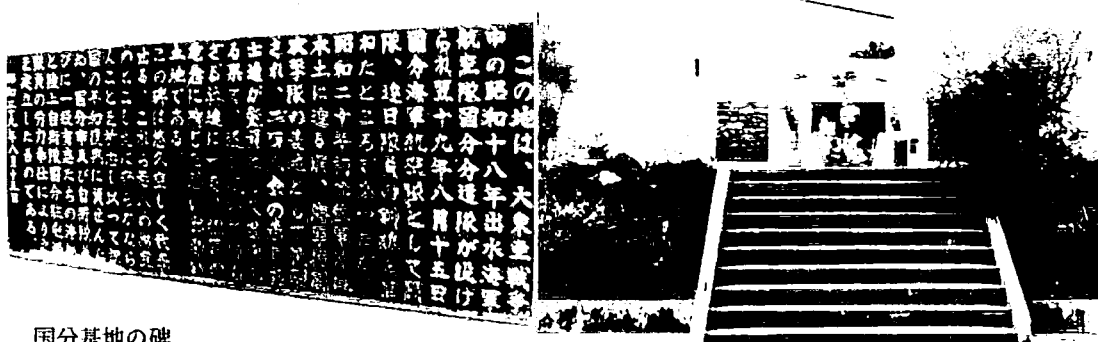
兄と弟の縁は深し年を経て
 遠き薩摩に兄を弔う
 遠く来て薩摩の國に兄と弟の
 深き縁を思ひ染むなり

はるばると今年も来つれ沖繩に
 連なる海をひと目見むため

南薩摩の果ての岬に立ちて聴く
 海風に偲ぶ遠き日のこと

南薩摩の果ての岬より見はるかす
 海の彼方に人は逝きたり
 亡き兄がわれを誘う呼び聲か
 南に遠き潮騒の音
 亡き兄が今わの際に喚びにけむ
 聲さながらに遠き潮騒

南より吹き来る風は亡き兄が
 われを誘う聲と聴き居り



國分基地の碑

第50回知覧慰霊祭

菅原 道熙

今年には第50回慰霊祭に当るので、知覧町当局は、町有林の松と杉をそれぞれ数十本伐採して、観音堂を立派な木造建築に建替えた。お堂が広くなったので、後方の灯籠は区画整理されて、更に献灯を受入れる余地が生まれた。

お堂の右手には、小泉首相の揮毫「至純」が刻まれた慰霊碑が建っていて(平成十七年五月三日建立)、面目が一新されていた。

5月3日に行われた祭典は、先づ慰霊法要、次いで慰霊式典と例年通り行事は進したが、今年の遺族代表は、義烈空挺隊の第3独立飛行隊で、20年5月24日沖繩中飛行場(現在の嘉手納)に向い、散華された久野正信中佐の御長女津田紀代子様で、切々たる追悼の言葉が、参列者の耳目を引き着けた。

御夫君と一緒に参加であった。

御遺族も、全国各地から二百名に近い方々が集まられた。相憎の雨模様であったが、盛況裡に式典は15時近くに終了した。去年は3人であった町出身の新自衛官は、今年には5人に増えての参列であった。

現在平成大合併で、知覧町は枕崎市と合併するか、更に加世田市、川辺町

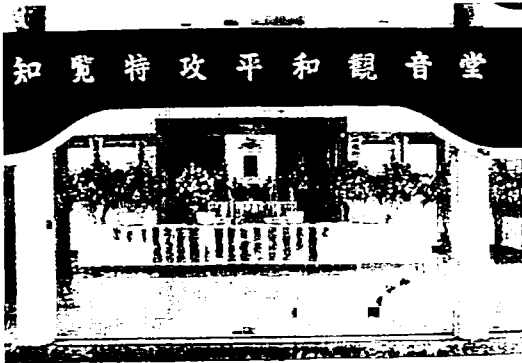
等を加えた広域合併の途を選ぶか、協議中とのことである。何れにしても、新市が誕生した場合に、特攻平和観音堂と平和会館は、旧知覧地区の施設として維持管理して行くことを検討中であるという。新市の施設として、色々な面でエネルギーが拡散してしまうよりは、歴史的に意義深いこれらの施設を「知覧」の名と共に地区住民が守護する方が、より賢明な措置であると思われた。



新築された特攻平和観音堂



小泉首相の献碑



新観音堂(内部祭壇)



右斜前方から見た観音堂

久野中尉と子供宛の遺書



正憲 紀代子へ

父ハスガタコソミエザルモイツデモオマヘ
タチヲ見テイル、ヨクオカアサンノイヒツ
ケラマモツテオカアサンニシンバイヲカケ
ナイヨウニシナサイ、ソントオオキクナツ
タナレバチブンノスキナミチニス、ミリツ
バナニツボンチンニナルコトデス、ヒトノ
オトウサンヲウラヤンデハイケマセンヨ。

「マサノリ」キヨコノオトウサンハ、カ
ミサマニナツテフタリヲチツト見テキマス。
フタリナカヨクベンキヨウラシテオカアサ
シノシゴトヲテツタイナサイ、オトウサン
ハ「マサノリ」「キヨコ」ノオウマニハナ
レマセンケレドモフタリナカヨクシナサイ
ヨ。オトウサンハオホキナチユウバクニノ
ツテ、テキラゼンフヤツツケタゲンキナヒ
トデス。オトウサンニマケナイヒトニナツ
テ、オトウサンノカタキヲウツテクダサイ

父ヨリ

マサノリ

キヨコ フタリへ

60年振りに手にした父の遺影

井上 晃一

筆者の父、海軍少将井上佐馬二（海兵44期）は、昭和20年3月17日硫黄島で戦死した。

先づ父の軍歴を概述すると、
（大正2年9月3日、海軍兵学校生徒を命ず）
（大正6年12月1日 任海軍少尉）
以降砲術科将校の道を歩む。
（昭和10年11月15日 任海軍中佐）
間宮、長良の副長を勤める。
（昭和11年12月1日 補海軍砲術学校教官）

体育科長在任中、海軍軍人の軍刀は塩風に曝される為、刀身が錆びて鞘から抜けなくなることがある。この欠点を補う為にステンレス鋼を使用して、錆びない刀を研究・製作すべく、横須賀海軍工廠の分廠を鎌倉市光明寺の裏山に天照山鍛錬場を設立。錆びない切味の良い海軍刀の研究・製作に取掛かる。父は試作刀を海南島に持参した。この海軍昭和刀は、大東亜戦争中に大勢の若い士官に愛用されたと聞いている。

（昭和14年1月20日 補佐世保鎮守府第八特別陸戦隊司令）
同年2月12日海南島攻略の為、同島

南部榆林攻略の為同島南部榆林・三亜の海岸線に、無血敵前上陸に成功。之に先立ち、太田司令（沖繩で戦死された太田 實中将）の指揮する呉鎮守府第6特別陸戦隊は、陸軍第21軍と協同して島北部海口に上陸作戦を開始していた。

（昭和14年11月15日 補横須賀海軍航空隊附兼教官）
ここで航空に転科した。

（昭和15年11月15日 任海軍大佐）
大湊・大村海軍航空隊司令を勤む。
（昭和17年2月14日 補第1航空隊司令）
以降高雄海軍航空隊司令を経て、百里原航空隊に転ず。

特攻57号を手にして、「第一御楯特別攻撃隊の全記録」抜の記事中の写真に目が止った。良く見ると2枚共父の横顔に似た人物が写っているのに気が付いた。

早速事務局に照会したら、写真提供者の西村友雄氏を紹介されたので、写真の御患写をお願いした処、折返し寺岡中将訓示終了直後の写真が送られて来た。父らしき部分を拡大してみると、正しく父の左全身像が浮び出した。

硫黄島での遺品は無いものと諦めて以来60年、茲に漸く写真が手に入ったその驚きと喜びは、筆舌に尽くし難いものがあつた。

然し父の表情は、何時もの毅然たる顔付とは異り、穏やかではあるが何となく愁いが見られる。

以下父の胸中を推測してみると、昭和12年3月逗子尋常高等小学校卒業6年2組59人の内、猪口 智君と武原鐵平君は中4修で海兵72期生に、筆者は中卒で陸士58期生に夫々将来の方向を分けた。

昭和19年4月旭川師団での隊附勤務を終えて相武台に向う途中、父に面会の為百里原海軍航空隊に立寄つた。
（昭和19年2月15日 補百里原海軍航空隊司令兼副長）
その日は天長節の祝賀で全員が集合して居り、偶然武原鐵平少尉（偵察学生）に会つた。

同年7月某日、突然父が白い軍服姿で士官学校を訪ねて来た。
（昭和19年7月10日 補南方諸島海軍航空隊司令）

既に戦術学で対米作戦、就中、島嶼戦法を習得済の筆者には、父が戦死を覚悟しての訣別の面会であることを悟つた。
（昭和19年10月15日 兼補硫黄島警備隊司令）

10月14日武原鐵平大尉、台湾東方海面にて戦死。鳥取県同郷の猪口敏平中将（武蔵艦長）10月24日戦死。11月3日、猪口 智大尉レイテ島タクロバン

で戦死。

第一御楯特別攻撃隊、大村隊長（72期）以下12名の若者を送り出す父には、間もなく任官する息子を見送るに似た心境ではなかったか、と推察される。昭和19年11月27日、〇八・〇〇硫黄島第2飛行場を離陸してサイパン島に向かう零戦隊員に、帽振る父の感慨を思うに、司令の立場より寧ろ父親の情が強く有つたのではないかと、筆者は推測している。

昭和19年7月相武台で父に別れて4ヶ月後の11月27日、特別攻撃隊出撃を見送る写真が、硫黄島に於ける父の唯一最後の遺品として、60年振りに息子の手に戻つたことは、有難く感謝の極みである。

大村少佐以下12名の英霊をお慰めする意を込めて、海軍短剣と共に該写真を靖国神社に奉納した処、平成16年3月12日付で、
井上左馬二命 御遺品
一、サイパン特別攻撃隊十二機出発前写真（於硫黄島）
として受納された。

会報記事が縁となつて、諦めていた父の写真が入手出来た経緯について、会員の皆様にお知らせしたいと考えて筆を取つた次第である。

旧鹿屋航空基地

特攻隊戦没者追悼式に参列して

理事 廣嶋 文武

平成16年4月9日 午前10時 鹿屋市今坂町 慰霊塔前の広場。

澄み渡った青色に、一機二機と次ぐ二編隊の慰霊飛行、儀仗隊弔銃と海上自衛隊の基地らしく、第46回の追悼式に参加することができた。

山下栄鹿屋市長の式辞に始まり、各界名士の追悼の言葉、とりわけ山田遺族代表の切々たる兄への思慕は、万感胸



に迫る心に込み通る弔辞であったし、この慰霊塔に祭祀されたあの特攻隊員

908名の栄誉ある誇りと平和の礎を、あらためて想起させていただいた。全国津々浦々から、今日の日の為に馳せ参

ぜられた多くの御遺族についで、協会を代表して恭しく白菊の一輪を献花

し、霊安かれとお祈りしました。式典は遺書の朗読、生存者による「同期の桜」の大合唱と続きました。

慰霊塔の側に

今日もまた 黒潮おどる海洋に

とびたち行きし 友はかえらず

太平洋戦争鹿屋航空基地より

飛びたち肉弾となりて散った

千有余の

特攻隊員 御霊よ安かれ

必ずや平和のいしづえとならん

昭和三十五年三月二十日

鹿屋市

この碑文を胸に深く納め、厳肅な名残り盡きない慰霊祭場を後にしたのでした。

文芸欄

小栗 楓子

イラクに派遣される自衛隊をテレビで見送って

陰ながら御無事のお帰り祈りけり
あの時は言へぬ言葉でありし

(北朝鮮へ拉致され、二十何年ぶりに帰国された五人の人達、そして

この度その子供さん達の帰国を見て思う戦死者とは全く次元の違う

ことで、比べること等はしない。羨ましい等とそんな気持もなく、

心よりよかったなと思った。けれども命さへあればとも思った)

命あらば地の果てにても年隔つとも
会うこと叶う時あるものを

朝夕のみあかしとます度ごとに
分れの時の瞳を憶ふ

国のため神去り給ひし友垣に
告ぐる言葉に迷うこの頃

以前はお陰さまで我が国も復興致しましたと、慰霊祭の祭文などで奏上したが、昨今の世情をみるに日本人の精神的頹廢著しくお国の為などという言葉は聞いたことがない。

小栗 楓子

靖国神社みたま祭に奉納の雪洞に書いた短歌について、編集者の求めに応じ申し上げます。

額つきし石のきざはし去りがたし
君を思えば君を折れば
と書くべきところ、変体仮名を用いました。

額つ支(き)し
起佐者志(きざはし)
去り可(が)たし
支(き)み越(を)思えば
君を折れ盤(ば)

この短歌は昭和十九年五月頃、故人がまだ戦闘機乗りになったばかりで白城子飛行場で訓練を受けていた頃、私は故郷の氏神様の古びた小さな石段に額づいて祈ったものでした。そして戦死、今、靖国神社の御前、立派な石段へ額づいてもあの時と同じ気持ちは変わりません。

年月は経れ世を異にしている身なれども
思いはいよ深くなりゆく



靖国神社の慰霊祭で響いた

「海ゆかば」

大穂 孝子

戦争を知らない私達年代の者には窺い知ることが出来ません。しかし乍ら、国の為、愛する家族の為

な心根がそのまま音に出ていると言え。 (末尾にメンバー紹介) 彼等のその持ち味が冒頭に紹介した便りに見られるように、ご遺族の心を博ったのではないかと思う。

た若者がどれだけのいるだろうか。いい悪いの問題ではないと思う。縁がないだけの事である。そのような状態のまま私達が済ませてきたわけである。軍人の妻であった私の母は足が立たなくなるまで自分が慰霊行事に出席し続け、私達に負擔をかけまいとした。文字通り「負」の義務であったのだろう。私共が長年親しくしてきた軍人の方達皆さまが同様であったと思う。自分ひとりの負擔義務であり、自分が生きて

【(前略) 特攻隊慰霊祭の時の真摯な演奏を思い起こし、若いそれぞれの心で、私よりもっと心をこめて英霊を慰め、吹いて下さったのかも知れない、と思いましたが涙が出てきて止まりません。そして、私共がただ昔を思い、亡くなった方々を偲び慰霊するだけではなく、いつの間にか音楽を通して感動と共に伝えていって下さる事に胸が熱くなりました。(後略)】

にその身を捧げられた行為こそ、人として至上の行為であると思います。その崇高な精神を私達は受け継いでいかねばならないと思います。

あの戦争が終って六十年が経過し、慰霊行事を続けてきた人達は老い、逝きて、行事の継続が困難な時期を迎えている。

私共が長年親しくしてきた軍人の方達皆さまが同様であったと思う。自分ひとりの負擔義務であり、自分が生きて

これは四月上旬、尼崎在住のご遺族から寄せられた私宛の手紙の一部分である(原文のママ)。

さきほど、靖国神社で「海ゆかば」を奉納させて頂きました。静寂の中、ラップの音を通して当時の情景を想像しようとしました。私が今、こうして

あのような場面に遭遇できることを、私は有難く思う。

だからこそ、私共は親が逝き、親しい方々が亡くなられた後はその心情を受け継がねばと思うようになったのだろう。身辺に手本があり、機会があったわけである。

桜の小枝で咲いて会おう、と誓い合ったと言われるその桜が萬葉と咲競う春三月、靖国神社拝殿で、本殿の大鏡に正対して「海ゆかば」を奉納したトランプ奏者・田嶋雅之氏は直会の席で、

生きていることへの感謝、そして今後は自分が国や大切な人達の為に尽くさなくては、と思っていました。そういう私の気持ちをお伝えできたでしょうか。」

「特攻で亡くなった方達は妻も子も、そして多分、もう親もいなくなるだろう。残った人達、次世代の人達が慰霊をしなければ誰がするのか。」

一般の若者達も、機会があり体験することが出来れば先人達が続けてきた慰霊行事、特に特攻隊慰霊祭の意義は対象が若年であるが故に、より理解し共感できるのではないだろうか。

「私は二十七才です。私より若い人達が特攻隊として国の為に戦い亡くなった事実を知った時、大きな衝撃を受けました。再び生きて還ることは出来ないと解かりつゝ、飛び立ったその胸中は

慰霊祭当日演奏したアンサンブルは世田谷区民吹奏楽団の中からピックアップして編成されている。少人数ではあるが、美しい、深みのある音を出すアンサンブルで、メンバー全員の爽やかな心根がそのまま音に出ていると言え。

「特攻で亡くなった方達は妻も子も、そして多分、もう親もいなくなるだろう。残った人達、次世代の人達が慰霊をしなければ誰がするのか。」

現に、瀬島会長のお話は若者の心に突き刺さったようで、アンサンブルのメンバーは来年の参加を討議し始めている。

(世田谷区民吹奏楽団副理事長)



写真説明

瀬島会長・志波副会長と世田谷区民吹奏楽団員。前列左から、上村義彦(62)、团长・福政博敏(52)、演奏者・田橋雅之(27)、松井千尋(21)。後列左から高美季子(26)、郡山和也(21)、松浦理恵子(21)、演奏者・鈴木隆春(24)。

特攻の研究者シエフタル氏

シエフタル氏とは平成十四年二月十八日世田谷観音でお会いした。その時の彼の言葉を綴る。

昭和37年(一九六二)ボストン生れ。ウエストポイントに二年間、その後大学で国際政治学を学ぶ。

昭和62年(一九八七)来日、子供の時から日本に関心を持っていた。

平成4年(一九九二)静岡大学非常勤講師。

平成14年現在 静岡大学情報学部・助教。助教になって、これからの二十五年間のテーマを考えた。自分は外国人である、外から日本人を見るこゝとが出来る。日本語が喋れる(奥さんは日本人)。軍人だったことがある。この三つの中から「特攻」を研究テーマとした。

「特攻」に就いて個人レベルのことを一杯聞きたい、私は主観は持たない。(相対論は泥沼に入るから)。活字で書いた絵、写真としたい。題名は「散華―特攻隊員の遺産―」。活字でとった写真の奥に実像が浮び出る。これを文字にしたい。特攻隊員の遺産を人類のものとして、普遍的な一。そして僕の息子に日本人の誇りを持って欲しい。右の話であった。

因みに、氏は毎月十八日の特攻観音祭にも度々訪れ、春の靖国神社慰霊

法要にも必ず参加される。そして氏は又言う、

「特攻を犬死にするのは、日本人の無関心しかない。もっと関心を持って欲しい、日本人の誇りなのだから。」

静岡大学ゼミ参加記

6月4日 ゼミナールに参加した。 深川 巖

ゼミナールの目的「生きている日本史との出会い」をサブテーマにして、本学の学生に特攻隊の真実・理念・歴史的な大切さを教えること。

場所・静岡大学浜松キャンパス情報学部

日時・6月4日10時20分〜11時50分
来賓・深川 巖 陸軍士官学校57期

竹井督朗 第197振武隊隊長
予科練13期

大場 禎 予科練13期
神雷部隊パイロット

広島文武 特攻遺族 特攻隊
戦没者慰霊協会理事

受講生・約16人の情報学部生
数人の情報学部教職員

司会者・M・G・シエフタル助教

ゼミナール方法・ディスカッション
受講生とのフリー対話形式
ディスカッション項目の大体

1、戦前・戦時中日本の様子
2、戦前の愛国教育

3、今、振り返ってみると当時の良かったこと、別のやり方でよければ良かったこと

4、来賓の特攻隊と夫々の関わり、入隊・志願する様子、等

5、特攻の理念
6、現代の宗教テロと特攻隊を絶対に同一視してならない理由

7、戦争の経験者として、現代の日本人の若者に特攻について伝えておきたいこと

ゼミは後半活発な質疑応答、さらに関連して突込んだ質問ありで、私も楽しみ且つ勉強になった。司会者のスライドによる来賓の経歴紹介は効果的であった。

日本人の心に、誇りと自信を取り戻して欲しい。これは、特攻のメッセージです、と、来賓一同願いを込め、今後の研究を願うと共に、静岡大学とゼミの皆さんに心から敬意を表した。

慰靈祭について思うこと

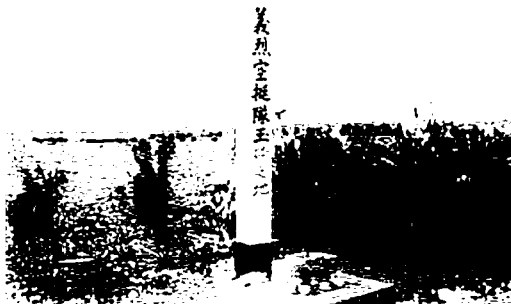
田中 賢一

毎月の靖国神社の社報を見ると、戦友会や同期生会の行う慰靈祭が多数載っているが、老兵の行うのは早晩なくなるのは当然である。戦死した戦友や同僚を思う純情は美しいが、後に続く者あるを信じて逝った英霊に對しそれだけでよいのか。とくに特攻隊戦死者に對しては 史実と精神を世に宣揚することが最大の慰靈となる。

今回の義烈の碑前祭は「落下傘」という隔月発行の空挺同志会の機関誌に掲載されるので、参加しなかった自衛隊の若い隊員にも知らしめることになるので、それだけでも慰靈の目的を達成しているが、私は更に不特定多数の人に宣揚したいと考え、このような私製葉書各百枚を作り、全部参加者に配布し、記事を書き加え最寄りの者に差し出すことを要請した。特に誤った学校教育を受けている若い者に出すことを強調した。

読谷飛行場跡に立ちて

この辺境に 散りしをのこら
狂乱を 既倒に廻らさんの心
燃えさかる 臯敵の とりで
路傍の小石よ 汝は 見しか
かつての叫喚 阿修羅の怒号
語り聞かせよ いくさ神の姿
泰平の美酒に酔う うつし世
知る人ぞ知る 丹きまごころ
あとに続けと 残せしことば
今ここに つどいしともがら
世につげむ 失いしやまと心
取り戻さずんば お国危しと



昭和20年5月24日夜半義烈空挺隊は沖縄読谷飛行場に突入翌日は敵飛行場の機能を完全に喪失させ航空特攻に奇功した

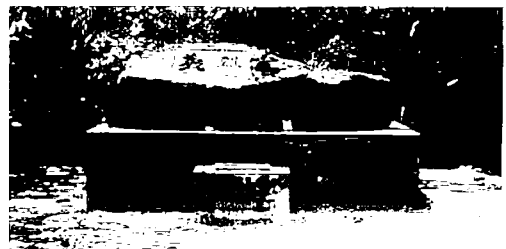
「義烈」碑の前で

魂魄寄り添う摩文仁の丘 鎮まるか義烈の土
思い出す百余のをのこ 奥山隊長の指さす所
など遅れをとるべきや

戦勢日に非なれど 乃公いでづんばの意気
挺身殉国の耿き心 我が後に続く者あらむ
散るべきときぞ美しく

梓弓 引きかへさざる ますらをのこころ
今日このために 鍛えしわざ 鍊りしきも
笑顔で発ちし健軍の基地

風吹けど雨降れど 敵として立つ義烈の碑
訪う人に 語る石ぶみ 人しるや いなや
我が国にかかる人ありしを



この碑は各県の慰靈碑が林立している摩文仁台上の一番高い所にあり、副碑には作戦の概要と隊員113人の氏名が刻んである。

ここに掲げてある葉書は、紙面の都合で実物より若干縮小してあることをお断りしておく。

今回参加した者の中、旧軍空挺隊員は十名だったが、全員私の提案に賛同してくれて、二百枚の葉書は忽ち持ち去られ帰宅後出すことを約束した。このような行動を地道に積み重ねることが慰靈であると信じる。

今回の葉書は慰靈行に焦点を合わせて作成したのだが、義烈空

挺隊員の心根を知らしめるような図柄のものを作り、9月に予定している高野山「空」の碑の碑前祭の際にも配付したいと考えている。なるべく若い者に送り付けるようにしたい。

なお帰宅後更に二百枚印刷し、空挺同志会沖縄支部長である第一混成団長君塚将補に各五十枚を送り、現地の自衛隊員及び地元の人々に配布しよう依頼した。

台湾・宮古・石垣特攻発進 基地巡拜慰靈旅行報告(上)

旅行日程

協会は、特攻発進基地慰靈旅行を計
画して、第1回(南九州、平12・2・
22)〜第2回(フィリピン、平13・
2・20)〜第3回(沖縄、平14・5・21
〜24)を実施しました。
今回は最後の台湾・
宮古・石垣巡拜慰靈旅
行を、左記の日程で実
施致しましたので、そ
の概要を御報告申し上
げます。

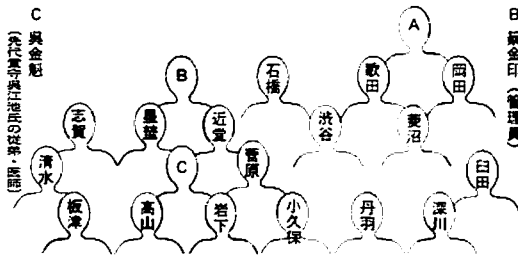
第1日(平成16年4月
19日)

参加者17人(大穂孝
子さんは、宮古から合
流)は、荷物を預けて
から出発ロビーで結団
式、岩下副会長を団長
に推戴。09・40成田発、
12・10桃園中正国際飛
行場着。

バスで新竹(空軍基



全台湾特攻基地向慰靈法要を終って



地)、龍潭(へり基
地)、八塊(現在八
德、陸士、陸軍化学
兵学校)を廻る。写
真撮影不可。

菅原 道熙
帰路、殆んど昔の姿を残す旧桃園神
社(忠烈祠)参詣。北投温泉泊。

陵地のキリスト教団墓苑に、最近荒廃
した台北中心地から移転した明石元二
郎第7代台湾総督のお墓に詣で、松山
空港から高雄入り。昼食後屏東飛行場
跡訪問。空軍基地は、正門に近付くと
直ぐ警笛を鳴らされる始末。軍民共用
で基地正門に向って左手前が民間航空
ターミナル。

次が岡山飛行場(空軍軍官学校)。
正門左手前の飛行機展示場は立入り写
真共自由。向いの軍事史館は閉館して
いたが、特別に開館。

台南飛行場(民間)は、出発ロビー
には入れたが、飛行場撮影は駄目。
鄭成功(台湾中興の祖、日本人を母
とする)を

祠る赤嵌楼
を見学、市
内泊。

第3日(4
月21日)
08・00出発
飛虎將軍廟
行。此処で
全台湾特攻
基地を対象
に慰靈法要
実施。(国歌
斉唱。小
久保隆福導

第5日(4月23日)
06・20出発、丹羽等、近堂純司両
氏帰国。那覇経由宮古空港着15・30、
大穂さん参加。

島内巡回は、大穂さんの幹施で平良
市福祉協会のバスを利用。
前夜来、沖縄・先島諸島は大雨。到
着時は小雨。間もなく止む。

島中央部の慰靈碑地区には、出発前
に把握出来なかつた、神風特別攻撃隊

師主導で般若心経唱和。焼香。海行か
ば、同期の桜、予科練の歌を斉唱。全
員導師持参の豊山輪ちがい袈裟を掛け
る(写真参照)。

次に鳥山頭ダム・八田与一記念館見
学。台南で昼食、高雄忠烈祠(旧高雄
神社)参詣。高雄市を一望。空路花蓮
入り。アミ文化村に寄って市中泊。

第4日(4月22日)
07・30出発、花蓮空港望見。昨夕到
着時、滑走路脇に幾つかの掩体壕を見
る。

列車で宜蘭。宜蘭河畔に建つ西郷庁
憲徳政碑見学。河川敷が北飛行場滑走
路であったと、星野清滋氏の説明。未
開発の俣残る中飛行場跡を訪問。

昼食後列車で台北。忠烈祠の衛兵交
替見学。中山大飯店(以前オーナー宋
美齡)の豪華なロビーを瞥見。桃園飛
行場近くに投宿。

06・20出発、丹羽等、近堂純司両
氏帰国。那覇経由宮古空港着15・30、
大穂さん参加。

島内巡回は、大穂さんの幹施で平良
市福祉協会のバスを利用。
前夜来、沖縄・先島諸島は大雨。到
着時は小雨。間もなく止む。

島中央部の慰靈碑地区には、出発前
に把握出来なかつた、神風特別攻撃隊

第三龍虎隊慰霊碑の存在を知る。碑前で慰霊法要を営み、大穂さんの指揮で海行かば斉唱。

亜熱帯植物園(旧海軍北飛行場跡)

入口に在る、北台湾海軍航空隊戦没者慰霊碑に海行かばを捧げ、更に奥にある海軍第三十三設営隊慰霊碑(両側に洞窟が残る)に詣で、薄暮に近く宿舎に入る。

第6日(4月24日)

離島前、不時着の地記念碑訪問。

白田智子さんは羽田へ。残る15人は正午石垣空港着。伊舎堂用久中佐(士55、昭20・3・26、石垣から特攻出撃)の甥、伊舎堂用八御夫妻、並びに親族の方々の出迎えを受ける。

昼食後、陸軍白保飛行場跡訪問、喜良悦子様、小里シゲ様(当時飛行場職員)同行。説明あり。お二人が持参した花束と菓子添え、飛行場北端を流れる轟川に掛かる橋上で北東に向って慰霊法要。帰路海軍北飛行場跡は車中合掌。市内伊舎堂家代々の墓所で慰霊法要。八重山平和祈念館の伊舎堂中佐遺品を拝観して慰霊行に終止符を打つ。第7日(4月25日)

午前中休養。星野清滋氏(閑空)、菱沼俊雄氏(那覇)を除く13人は、15・35羽田着。天候に恵まれ無事故に終ったことに感謝して現地解散。

飛虎將軍廟での慰霊祭

団長 岩下 邦雄

戦争中台湾からは台南、台中、新竹、花蓮、宜蘭等の数箇所の基地から陸海で約三五〇機の特攻機が出撃し、約五〇〇名(推算)が戦死されています。

戦後六〇年を経過して、これらの基地はすっかり様子が変わっており、慰霊祭を行なえる適当な基地が見つからぬ為、菅原理事長と相談して、海原会などが慰霊祭を行なった事がある台南市郊外の飛虎將軍廟で、台湾全基地の統合慰霊祭を実施する事にしました。参加者の近堂純司さんは嘗て南部の高雄中学校に在校し、台湾の事情に詳しく、廟の関係者にも知り合いがあるので何かと都合でした。

実は私はこの廟は、町はずれに建てられた「祠」程度のものであろうと思っていました。訪台三日目の四月二一日に一同がバスで到着したところ、市街地にあり、横浜市の中華街でも見られるような絢爛たる色彩の立派な建物で、又守っていて下さる方が、日頃煙草等をお供えてお参りされていると聞き感激しました。廟には日本海軍の三名の搭乗員の霊が祀られておりました。

先ず全員で国歌を斉唱した後小久保隆福さんが般若心經を誦経されるなか全員が焼香してご冥福をお祈りしました。

最後に皆で「海ゆかば」を唄い沖繩の戦場で散華された特攻隊将士の壮事を偲びましたが、一行の中には当時台湾の各基地に勤務した方もいて万感胸に迫る様子でした。当日は我々の慰霊祭のことを伝え聞いた数人の台湾の方も祭場に来て、吾々に話しかけてくれましたが、皆さん友好的で心とむいでした。

この度台湾各地を訪問して、多くの先輩が台湾の発展に献身され、立派な業績を挙げられている事を知りました。以下に簡単に述べます。

第七代台湾総督になられた明石元二郎さんは水力発電事業、教育改革(台湾人も日本人と同等に勉学の機会を与える)、台湾全土に及ぶ交通網の整備などを実施し、今もその徳を称えられています。

死後ご自分の墓を「台湾に建てよ」と遺言されました。

大正八年の調査開始以来、完成までに一二年を要した大工事でしたが、当時二五才の青年技師八田 興一さんの努力により出来上がったものです。

八田さんは昭和十七年に乗船が米潜水艦の攻撃で沈没した時亡くなられましたが、奥様も終戦後疎開先の烏山頭から内地に帰る直前にこのダム放水路に投身され、今もお二人の慰霊碑がダムを見下す丘に建てられていました。私は此処を見学して、スケールの点では大きな違いはあっても、その着想が壮大であり、事業の完成が流域住民に与えた利便の絶大な点で、コロラド川に建設されたフーバーダムに匹敵する大事業であると思えました。

宜蘭平野は嘉南平野に次ぐ台湾第二の穀倉地帯ですが、此処を流れる宜蘭河が毎年氾濫して住民が困っていたところ、明治三〇年に宜蘭庁長として赴任した西郷菊次郎さんは、河に沿って延長三七四〇メートルの立派な堤防を建設しました。この堤防のおかげで災害から救われた住民は西郷さんの功績を称えて西郷堤防と名づけています。

台湾中部の大平野を潤して、地域住民の農業用灌漑水や飲料水に利用されている烏山頭ダム(通称八田ダム)は

台湾の方は大変信仰心が厚いと聞いていますが、我々の先輩方が優れた業績を挙げられ、又住民がそれを高く評

価し尊敬しているからこそ、飛虎將軍廟の例のように、戦後六〇年を経た今でも、日本軍搭乗員の霊を鄭重に守って下さっているのだと思いました。

このたびの慰霊旅行は台湾各地のゆかりの場所を訪問出来、予定された行事をすべてこなして全員無事に帰国できました。慰霊団々長としては誠に至らぬ点が多かったと思いますが、参加された皆さんと共に、気持ちのよい慰霊の旅が出来ました。沖縄の戦いで亡くなられた特攻隊将士の霊を祀るとい

う同じ志がこのようない結果を招いたものと思ひ深く感謝致しております。有難うございました。

特攻隊発進基地跡を訪れて

清水 昭俊

旅行中は、久方ぶりに日々の慌しさを味わい、同行の皆様方に導かれ、教えを請いながら、慰霊の地を訪ね、やっとの思いで帰国することができました。

1、旅行の日程について

3月17日に説明を受けたときは、連泊なしでの7日間の移動であり、行程の消化に耐えられえるか、一抹の不安がありました。4月19日からの緊張し

た日々を過ごし、旅を終えて帰国したときには、充実感が残っていました。事前に検討され、丹念に練り上げていただいた計画と現地での適切なご指導のお陰であり、感謝いたしております。

2、慰霊の基地について

慰霊のために発進基地を訪ねるといふ案件は、納得性の高い、素晴らしい企画だと思いました。59年から60年前の基地を訪ねたわけですが、同行の先輩方の貴重な体験談に支えられて、英霊の在りし日の姿を偲び、当時の動きを思い浮かべることができたように思います。台湾の基地では、特に、宜蘭飛行場跡地の姿が印象深く残っています。

3、特攻の戦闘について

航空特攻について、予科の時代に、中隊の二人の先輩が比島で散華されたことを知らされています。肉攻については、地上兵科の60期として、訓練を受け、演習に参加しています。必勝の信念を堅持し、戦果の期待できる戦闘を形成すべく、精進した一年十六ヶ月だったように思います。当時のことを、改めて思い起こします。

宜蘭にて

深川 巖

特攻隊発進基地巡拝第4日目の4月22日は宜蘭であった。同期の渡部國臣君が発進した台湾東海岸の宜蘭、そしてこの日であった。20歳2ヶ月の彼は飛行第19戦隊特攻隊長として3式戦機16機6名を掌握し、4月22日特攻機6機の長として宜蘭発進、同日薄暮沖縄慶良間湾内の敵艦船に突入し戦死した。私は今、彼等が最後に踏みしめた大地、中飛行場に立っている。多分ここは滑走路であつたらう、低い雑草と所々に舗装跡が見える。一爆音と喧騒が聞



宜蘭中飛行場跡に立つ

こえるようだ、離陸、機影が空にとけ込む。私は今、彼等の代りに大地に立っている、そんな気がした。祈らずには居られない。

家族を思い、國を思い、その為にこそ命を捧げた。この命は、死して尚貫く生存である。私は、貫く生存を信ずる。それ故にこそ慰霊顕彰したい。私のこの現世の生命はあなたの身代り、そして今、あなたの代りにこの大地に立っている。

慰霊巡拝を終えて

平成12年の南九州基地巡拝、13年フィリピン戦跡巡拝と洋上慰霊、14年沖縄戦跡と洋上慰霊、今回の台湾・宮古・石垣発進基地巡拝に同行出来たことは感謝の他ありません。ご同行の皆様との語り合いも忘れられません。特攻隊戦没者慰霊協会の行事として企画、指導して下さいました最上前理事長に深く感謝申し上げます。

薫空挺隊の話

(ネズミ色の地に印刷してある文を順を追って読みたい)

この部隊は正規の空挺部隊ではない第十四方面軍と第四航空軍で臨時に編成した空挺部隊である。台湾軍で編成した第一遊撃中隊が使はれたが、この

印象に残ったこと

志賀 昭夫

今回初めて特攻隊慰霊旅行に参加させて頂きました。以前に知覧、万世基地跡および海軍鹿屋基地跡は慰霊訪問したことはありましたが、誠に恥かしいことながら今回訪れた各地特に宮古島石垣島が沖縄特攻の重要な基地であったことを初めて知りました。石垣島の慰霊祭では、今にも滑走路の彼方から発進した特攻機が我々の頭上を超えて那覇を目指して飛び立って行くような感慨を覚えました。

生まれ故郷の石垣島から出撃した伊舎堂中佐は、祖国防衛の一念から散華した全特攻隊死者の思いを象徴しているものと思いました。また、参加者の諸先輩は特攻護衛または戦果確認のため激しい戦闘に参加され、さらには特攻隊員として待機中に終戦を迎えるなど、慰霊にあたっての感慨は如何ばかりかと拝察いたしました。

台南では防空戦闘の末、自らの脱出の機会を捨てて民家を避けて墜落戦死した杉浦茂峰兵曹長が、飛虎将軍として祀られ民衆の崇敬を受けていることに感動しました。現地市民からみれば異教徒であることを考慮してか、朝は君

が代、昼は若鷺の歌、夕方には海行かばを毎日演奏しているとのこと、人々の感謝慰霊の念の厚さを表しているものと思います。

そのほか、明石総督の墓や八田技師の記念館、西郷堤等、往時の日本人が単なる植民地政策としてではなく、現地民生の向上のために尽力したことが今に至るも本省人(日本時代の本島人)の感謝を受けている所以と思えました。松園神社の社殿玉垣社務所や狛犬等がそのまま残り忠烈祠(日本の護国神社か)となっていることは、日本人の心が現在も本省人に残っているような感じもしました。



お墓は三芝郷墓苑の中にある

以上の諸印象から同時に、日本時代を知っている本省人の、戦後の外省人による台湾治世や、国際間における台湾の位置づけに対する微妙な感情も窺えるように思いました。北投温泉の旅館名に日本風の名前の散見されることにご愛嬌でしょうか。

今回訪問した曾つての日本軍飛行場が台湾空軍飛行場となり、立入はもちろん写真撮影もままならなかったことは残念でした。施設の性質上当然かとも思いますが、台湾と大陸の緊張した関係を実感しました。

宮古島石垣島は共に本土防衛の最前線であったが、宮古島には多くの慰霊碑があり大切に守られているのに対し、石垣島には特攻隊等戦死者に関する格別の慰霊施設はないように見受けられました。八重山平和祈念館の説明文によると日本軍に殺された米軍飛行士の慰霊碑は平成13年に建立との由であります。これは両島の沖縄本島からの地理的關係によるものかまたは、石垣島では戦争末期の強制疎開に起因するマラリア病による三千名の死者の方が島としては重大に扱われるべきということでしょうか。更に説明文には本土復帰に至るまでのマラリア病による戦没将兵の慰霊碑は復帰前の昭和42年に建立されているとのこと。

八重山平和祈念館は国の予算で建設されています。マラリア病による死者については間接にせよ戦闘に伴い多数一般市民が犠牲となったことが島の歴史にとって極めて重大な事件であることは当然であるとは十分に理解できませんが、いささか感ずるところなしとしないものがありました。あるいは、前記戦没将兵の慰霊碑の死因がマラリアに限定した表現となっているのは、米統治下であることを考慮してのことだったのでしょうか。

何れにせよ沖縄県民の複雑な思いを垣間見たように思います。今回の慰霊について伊舎堂家の皆様のお喜びも一入であったことでしょうか。

事前勉強不足のため、訪問した各地が特別攻撃にどのような役割を果たしたかについては不十分な認識のまま終わったことを申し訳なく思っています。なお、今頃になって石垣島が台湾北端より南にあることを知ったのも恥ずかしながらひとつの収穫でした。

団員の皆様や添乗員には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

慰霊の旅にお誘いを受けて

石橋 登美子(一歌)

今回の旅行に参加するに当り数年前靖国神社での少飛会慰霊祭に出席されていた台湾の方が、「先の大戦に於いては、私達の中で日本の為に戦死した者が居るのです。台湾では日本人もお祀りし慰霊祭も行なっております(その頃日本の政治家の靖国神社参拝問題が有りました)日本の方もその事を理解して下さい」と話された事を思い出しました。

一、「桃園神社」 昭和十三年、日本が建てた神社、今は忠烈祠と成っています。鳥居は除かれていたが、手水舎も社務所も有り狛犬と銅製の神馬も有りました。社殿は樹々に囲まれて静かな環境です。今日、日本が建てた神社で略々原型を止めているのは、このお宮だけで、「文化財」と成っているとのことです。

一、「鎮安堂 飛虎將軍廟」 バスを降り目の前に、台湾独特のきらびやかな造り、朱色、金色、大理石の柱、大変立派なお社です。昭和十九年十月十二日台湾沖航空戦当日、台南市上空の日米空中戦で零戦は敵機に体当たり、無念にも右翼に弾を受け(米軍機も墜落)

急降下、真下の部落が目に入り、急に機種を上げ部落東に飛び去り爆発炎上。パイロットの下半身が農地に落ち軍靴には「杉浦」と書かれていて、戦後の調査で杉浦茂峰兵曹長と判明しました。数日後より、毎夜白い帽子に服を着た若い海軍士官が枕元や畑の方に立つ様になりもしやあの時の部落を戦火から救った恩人の霊ではないかと、畑の持主は小さな廟を建て毎夜お祈りする様にしました。信仰心の厚い部落の人々が平成四年に杉浦茂峰兵曹長の恩徳を感謝し永久に顕彰し讃えるべく現在の廟を創建しました。この廟は朝には

「君が代」と「海ゆかば」を歌い、昼には「予科練の歌」を捧げていると云うことです。この立派な、み霊屋は横浜の関帝廟に似て居ると思いました。一同小久保上人の先導に依り、袈裟をかけ日本から持って来た品々をお供えし厳肅に慰霊祭を挙行、「君が代」「海ゆかば」を斉唱して、しばし黙祷しました。靖国神社での台湾の方の言葉思い出し全台湾への慰霊が出来たことに感動を覚え、まだまだ多くの英霊に感謝追悼の誠を捧げなければならぬと思いました。

一、「発進基地跡」 バスは草原の中を進みます。水牛が草を食んでいます。「あ、ここです」ガイドさんの声に一

同バスより降りました。嘗ての宜蘭中飛行場跡で、原野として残されています。外はむっとして、温度は三十六度以上はあったでしょう。

昔を偲んで炎天下を奥へ歩いて行く人、或は我を忘れて佇む姿を見て、その心情を察して、私は靖国神社と世田谷特攻観音で春秋に献吟する時には、何時も命の方々の最後の言の葉(詩)からその心情を推し測っています。その様な自分と、原野に立つ皆様の姿がふと重なってしまい、思い出を語る皆様の言葉に心を打たれました。

一、「高雄の忠烈祠」 昔の護国神社で、高い白い階段を登ると、港の見える丘陵地に広い社殿が在りました。パ

一、「台北の忠烈祠」 日本の靖国神社に相当する忠烈祠で、夕方の衛兵交替に間に合って、式後衛兵と一緒に写真を撮りました。予定外でしたが台湾ガイドの機転で、珍しい光景に接することが出来ました。



宜蘭河西郷堤の西端に建つ西郷庁憲徳政碑、左側河川敷は嘗ての北飛行場滑走路



ダムを望む丘の上に建つ八田技師の像



八田記念室入口に掲げられている夫妻の写真

畔堤防に「郡守徳政碑」が在り、その碑文に依れば、菊次郎は郡守になって手掛けた宜蘭河の治水工事が功を奏し、人々を災害から救うことが出来、その功績を讃えて建立されたと記されてい

ました。
一、「八田與一氏とダム」 多くの犠牲者が出る難工事に、努力を重ね発電に農業水利に、酷暑と病魔に戦いながら歳月をかけて築き上げたと言ふ「烏山頭ダム」北端の丘に、功績を永久に記念するため八田さんの像が八田氏が工事中、よく考えて座っていたままの姿で、建てられています。

八田氏は次に南方の水利開発の為、大洋丸に乗船、途中米潜水艦に撃沈され、不帰の人となられました。終戦と共に台湾を去らねばならない奥様は、夫が辛苦して築き上げた「烏山頭ダム」の送水口の渦巻く水の中に、六人の子供を残し、夫の後を追ったと聞き、何とも言えぬ感慨に打たれました。奥様は悲しさに耐えられなかったのです。

誠に痛ましいことです。
一、「宮古」 宮古は二度目の訪問です。宮古空港に大穂さんが出迎えて下さいました。外は小雨模様でした。一同バスに乗り慰霊の塔地区へ。福祉協会の方が皆に傘を用意して下さい、

その氣遣いに感謝しました。
小久保上人の先導で慰霊祭を行いました。

一、「石垣」 石垣には風雨の為、飛行機は少しおくれでしたが無事に到着しました。伊舎堂さんの案内で陸軍白保飛行場跡地へ。生き証人と云う方の保飛行場跡地へ。生き証人と云う方の話を聞き、指さす彼方を見て思いも新たに一同特攻機が発進して征った方向に向ってお香を上げて慰霊祭を行いました。

この度の慰霊の旅では、多くの方々から色々なお話を承り亡くなられた方それぞれに多くの秘話が有ったであろうことを色々学ぶことが出来たこと心から感謝の念を捧げます。 合掌
部隊の兵は通信手と衛生兵以外全部高砂族であり、その頃十四方面軍の所屬となりルソン島のリバにいた。

レイテ決戦が始まり、ルソン島からレイテ島に送り込む軍隊や補給品を積んだ船が、敵航空によって甚大な打撃を受けているので、レイテ島の航空基地を空挺攻撃により制圧しようとする企図した。第二挺進団も到着していたが、まだ飛行機が未着で態勢が整っていない。

レイテで敵が使っている飛行場と11月17日頃の在機数は次の通りだった
タクロバン 200機

台湾での慰霊祭

白田 智子

4月19日成田を発ち、三時間ほど台北国際空港着、参加者17名中女性は二人。後で宮古から一人参加されました。

地元旅行社のガイド2名、成田から女性添乗員とで案内、世話役が3人の充実振りでした。初めての台湾で多少の不安もありましたが、気候、服装、食べ物等は主人より聞いていましたので心配なく過せました。高雄空港の温度計が夕方で36度と表示されていま



飛行機展示場の対面にある空軍軍史館

た。冷房バスで気付きませんでした。この時台湾は暑いと思いました。

20日、午後、岡山飛行場の軍用機展示場を見学し、特別に開館して呉れた空軍軍史館も見学出来ました。館内には親子鷲が展示してありました。空軍基地には、門の両側に必ず親子鷲が鎮座していることに気付きました。なぜか私はその親子鷲に心を引かれました。

21日最初の訪問先は台南の飛虎將軍廟です。朝8時にバスに乗り、途中市場でお花を買い求めました。市場の中は買物客でにぎわっていました。店先には色々な果物、野菜、肉や魚、日用雑貨等が山盛りになって威勢良く売ら



空軍軍官学校正門(岡山飛行場)



軍史館内の親子驚像

た軍靴に杉浦と記名されていたそうである。戦後になって、部落の人達から不思議な夢を見た、話しが広まり、白い帽子、白い服を着た日本の若い海軍士官が枕元に立っている。私も同じ夢を見た、私も、私もと名乗り出ました。有志が集まり、部落に被害を与えることを避けて、自分の命を犠牲にしたあの時の日本海軍操縦士の亡霊であろうと云うことになって、その人のお堂を建てて、永久に顕彰する事になったのだそうです。バスは鎮守堂の前に着きました。屋根は朱色、何しろ予想を超える華やかさです。台湾風のきらびやかな造りです。中華民国旗と、日の丸が両脇に立っています。階段を昇ると大理石の柱には、正義・護国・英雄・忠義・大義の文字が刻まれているのが目に入りました。すべてが飛虎将軍の壮烈な戦死を讃えていました。将軍像の正面で君が代を歌い、小久保住職様の般若心経読経下に全員が焼香をし、特攻観音経を読み上げ最期に「海ゆかば」の斉唱を捧げました。

ここには毎日、朝夕に君が代のテープを流して煙草を上げ、午後は「海ゆかば」を奏でていると聞きました。鎮守堂前で記念写真をとる、全台湾向けの慰霊法要は終わりました。鎮守堂には多くの日本人がおとづれているとの事でした。台湾に来て日本が忘れてしまった心が今も生きつづけていることを痛感しました。

私は特攻隊の遺族として、特攻隊に限らずパイロットの最後は壮絶な戦死なのだと思いためて思い知りました。だからこそ慰霊を行う必要があると思えました。

これからは戦争を知らない人達の為に協会として、日本の飛行場跡地戦争記念碑、今しなければ出来ない戦争体験者の講演等を企画していただきたいとお願い申し上げます。今回の慰霊の旅、皆様との出会い、私にとって貴重な体験となりました。皆様に感謝申し上げます。

- ブラウエン北 100機
 - ブラウエン南 100機
 - サンバプロ 少数
 - ドラッグ 少数
- そこで第四航空軍では、遊撃第一中隊の一部を飛行第二〇八戦隊の零式輸送機(DC-3)に乗せ、ブラウエンの両飛行場に強行着陸攻撃させようとした。

鎮魂の旅より帰って

松田 陽一郎

一、特攻
 上級指揮官は我が艦船に対するミッドウェイの米軍航空戦訓は存じていたはずである。それが活かされなかった事は残念です。

それが活かされていけば「特攻」攻撃は行われなかったと思う。
 二、大東亜戦争における特攻用兵の問題点
 一、特攻は奇襲により戦果を期待したのであるが、通信機材特にレーダーの発達で、奇襲は至難であったと思う。
 今度の旅でも特攻機は少数機の出撃の反響だったことが分かり、これでは目標到達前に敵戦闘機に撃墜されて目的が達せられなかったのではとも思う。

又対空砲火の集中も上げた。
 それが為にも重点目標にまとまった機数で攻撃すれば攻撃の効果が上がったのではないかとも思う。

攻撃目標は母艦に限定せず対空兵器装備の弱い輸送船に戦爆が協力して攻撃すればいい結果が生れたと思う。
 2、先行偵察機の十分な協力なしでは攻撃が成功しなかったと思う。
 3、強力な護衛戦闘機の協力必要。

なぜここに飛虎将軍と尊称されたのかと申しますと零戦と米グラマンの空中戦を目撃した人の話によると、零戦は無念にも被弾して、火をふき、今にも爆発しそうな時、操縦士は大きな部落(海尾寮)上空であることに気付いて、機首を上げて上昇、部落東側に向ったが、間もなく爆発し、操縦士の下半身が畑に落下しました。履いてい

た軍靴に杉浦と記名されていたそうである。戦後になって、部落の人達から不思議な夢を見た、話しが広まり、白い帽子、白い服を着た日本の若い海軍士官が枕元に立っている。私も同じ夢を見た、私も、私もと名乗り出ました。有志が集まり、部落に被害を与えることを避けて、自分の命を犠牲にしたあの時の日本海軍操縦士の亡霊であろうと云うことになって、その人のお堂を建てて、永久に顕彰する事になったのだそうです。バスは鎮守堂の前に着きました。屋根は朱色、何しろ予想を超える華やかさです。台湾風のきらびやかな造りです。中華民国旗と、日の丸が両脇に立っています。階段を昇ると大理石の柱には、正義・護国・英雄・忠義・大義の文字が刻まれているのが目に入りました。すべてが飛虎将軍の壮烈な戦死を讃えていました。将軍像の正面で君が代を歌い、小久保住職様の般若心経読経下に全員が焼香をし、特攻観音経を読み上げ最期に「海ゆかば」の斉唱を捧げました。

4、隊員には己が習熟した最新鋭機を以て出撃させたかった。

5、反覆攻撃のためにも燃料、爆弾の問題も装脱着等の問題も考えてほしかった。

6、誘導機は先行偵察機と協力し確実に目的地点までの誘導が出来る様努力していたので、その任は特攻と変らなかつたと思う。

三、特攻隊長が同期生に托された言葉
1、山本隊長出撃を見送った同期生菱沼、鈴木両氏に「あとをたのむ」と出撃されたこの意味は大きい。

日本と大和民族の悠久の発展を希つたものであろう。

2、戦士敗れ世は変動した。

吾々はこれら特攻隊員の偉大で崇高な精神にこたえなければならぬと思う。

3、隊員の墓参慰霊にとどまらず。

隊員の崇高な国を思い民族を思う気持を後世に伝える義務があると思ふ努力しなければと誓うものである。

四、国防

戦のない日本、平和なうるわしい日本、これが特攻隊員の一番ねがった事だと思ふ。

これが為にも国防は大切な事だと思ふ。

五、終わりに思う

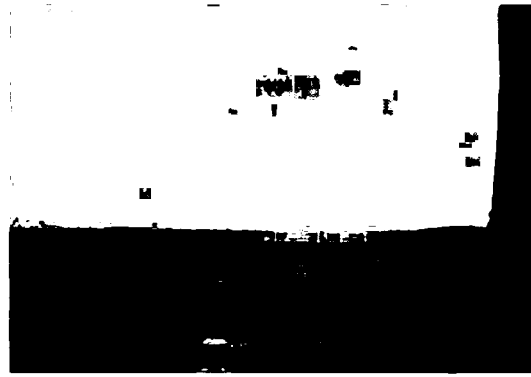
遺霊は永遠であると。

台湾・石垣・宮古特攻 発進基地慰霊旅行記

板津 忠正

台湾は私自身昭和十九年八月から五ヶ月間訓練をした所であり高雄、北斗そして屏東の南潮州などは想い出深く、また桃園、花蓮、龍潭、八塊等沖繩特攻作戦を調べていて是非とも自分の目でたしかめたいとの思いから、今迄に一般のツアーに三度程参加して来たが、台湾の慰霊旅行は始めてなので、直ちに参加申込みをした。

菱沼さんと御一緒することになった



ヘリコプター基地となっている龍潭飛行場

が、菱沼さんのお父上が私の出身である航空機乗員養成所の所長をして居られた関係もあって今迄に一、二度手紙をやりとりしたがお会いするのは初めてであったが、後述する様にその実深い御縁があったのには驚いた。

台湾での各飛行場巡りはその殆んどが現在中国空軍の基地として使用されたり、陸軍士官学校になったり、中に入る事は許されず車窓から眺め、カメラに納めるのみであった。

最初に訪れた新竹では正門から入った奥まった処に蒋介石の像が見受けられた。八塊(現在八德)飛行場は、陸士その他軍学校に変わり、龍潭はヘリコプター基地になっていた。

翌20日訪れた仁徳に在る台南飛行場は、中に入る事は出来たが、写真を撮ることは許されなかつた。次いでかつてオランダ人によって築かれた、赤崁楼を参観、オランダ軍を追放した鄭成功の歴史資料館を見学した。こゝ

台南市は二百二十四年の間台湾の首都として行政文化の中心地として栄えた所である。21日は先づ飛虎將軍廟で慰霊法要を行ないこの地近郊の水資源鳥山頭ダムを遠望し、それを造った八田

与一氏の銅像を見る。八田氏の長男が嘗て愛知県土木部長を担任されたので、私も名古屋市の土木行政に携わった関

係もあり、かねて八田与一氏のことには関心があった。

この台南と北部の嘉義を結ぶ大地に通水して食糧の大増産を可能にした功績に、戦後三十数年たった後回収されていた銅像が元の位置に戻されたこと云うことを聞き、恩恵を受けた住民の感謝の結果であり、台湾を旅行すると、日本のお陰で今日の台湾があるとよく耳にする言葉が実感としてうなずけた。

高雄港と市内を一望できる寿山公園では、殉国者の英霊を祀る忠烈祠におまいりする。

かつて境内に裸足で歩いた足踏石があるのを思い出し、今度も歩いてみたが歳のせいかひどく痛みを感じた。

22日前夜遅く着いた花蓮から宜蘭へは特急列車で移動した。着後先づ西郷堤と其処に建つ西郷菊次郎顕彰碑を見学、西郷庁長の功績を知って印象深いものがあつた。

三ヶ所あつた飛行場から第一〇五戦隊の特攻機が出撃したとの事であるが、その詳細は知る事ができなかった。

再び特急列車で台北へ戻る。

23日は、台北から那覇で乗り継ぎ午後宮古に到着した。

平良市ではトライアスロン大会前日で人も多く、天候も到着時小雨模様であつたが間もなく止んで、慰霊碑の集

中している島中央部へ赴く。

神風特別攻撃隊第三龍虎隊七名をまつる碑前で慰霊法要を行う。

この地から出撃した、三村弘上飛曹は航養出身で以下六名とも中型練習機で出撃散華され、碑には

背を丸め深く倒せし操縦桿

千万無量の思い今絶つ

とあり航養出身のベテラン操縦士でありながら中練で征かざるを得なかった、その心境を察するに如何に無念であったか、想像するに余りあり。

翌日石垣島へ渡る前に、我々航養の大先輩である一期生の小田泰治中尉の不時着地記念碑を訪れた。

慰霊旅行も六日目に入り宮古から石垣島へ、空港では同島出身で沖縄特攻作戦第一号で突入された陸士55期の伊舎堂用久中佐の御遺族伊舎堂用八様御夫妻と親戚一同が出迎えて下さった。

伊舎堂家の長姉の石垣テル様は生前那覇市に居住されて居り、私は那覇でお会いした。知覧に掲げられている中佐の遺影は、石垣テル様より頂戴してお写真で、平成七年からずっと文通をしていた。亡くなられてからは伊舎堂用八様と交流、当初は高校教師をして居られた関係で、知覧でお会いする機会は無かったが、平成十一年の知覧特攻戦没者慰霊祭にはご遺族代表として

慰霊のことばを述べて頂いた。

奥様とは、私が石垣島を訪れお墓におまいりさせて頂いた折にお会いしたので、今回は懐かしさも加はって親しく挨拶をかわした。

伊舎堂用久隊長率いる誠第十七飛行隊と独立飛行第二三中隊、計十名の発進基地白保飛行場では、特攻機が浮上する附近で、般若心経と特攻平和観音経を唱え焼香、そして海行かばを斉唱した。

この時当時を知る地元的女性二人のお話を聞き感慨にふけた。見渡す限りの飛行場の跡は緑濃く青々と作物が繁り、当時の面影は何も残っていないかった。

続いて伊舎堂中佐の墓参をする。私は二度目のお詣りであった。

八重山平和祈念館では一年前伊舎堂用久中佐の遺品展が行はれ、その折に御案内を頂戴したのだが果せず、今回拝観する事が出来た。

館内では中佐と起唐を共にした誠第十七飛行隊と独飛第二十三中隊員名に目をひきつけられた。

その中には私が直接操縦を教はった少飛六期生の長野光宏少尉、同部隊の須賀義栄少尉(下士官学生)の名が目に入った。21年前に愛媛県の実家近くのJR七間駅にてお会いした、黒田釋

少尉の御母堂様は、当時八十四才で7月には知覧に行つて来たと言話して下さった、気丈夫な方であった。

また高松市でガソリンスタンドを経営なさっていた広瀬秀夫少尉の家、富山県出身ながら立川市に居住の金井勇少尉の御遺族等々の事が次々と想い出された。

以上の隊員の御霊にはお詣りする事が出来たが、高知市出身の安原正文大尉の家は改築中で、仏壇に焼香も出来ず、遺影が何処にあるかも知れずで終わったが、後日ご近所の親切な方が送って下さった。御母堂様は当時八十九才で天涯孤独、失対事業で働いておられたが、今日は土曜日なのでたまたま家に居たと話されて、歳とは思えぬ程丈夫な方であったことを思い出した。

また阿部久作大尉の御遺族とは今なお文通を続けている。航養の先輩である福岡市の岩本光守少尉は未だに住所が不明である。御存知の方が居られるならばお知らせ願いたいと思つている。

以上中佐以下十二名の隊員にはまだまだ書きつくせない悲しい話もあるが、今回はこの位で留めておく事とする。

慰霊旅行最終日前日、お別れの夕食会の席、菱沼俊雄さんとお話する機会があった。

前にも書いた様に氏のお父上は都城

航空機乗員養成所々長で、何となく親近感の様なものがあつた。お話しの中で所沢出身と云う事を知り、所沢航空博物館が竣工した際に、新日本航空協会所有の三式戦「飛燕」を同館に展示すべく招致委員会の副会長として運動して来られた菱沼さんは、所沢市と航空協会の間でその旨文書契約を取り交してあつたと承つて、吃驚した。

双互で文書契約を取交して略々決ましかけていた三式戦の飛燕は、現在は知覧特攻平和会館に展示されていて、すでに十数年になる。

知覧特攻平和会館を新築するに当り館内の目玉となるべき物を物色していた私、飛燕は各務原の自衛隊基地格納庫に在ることを知つていて、白羽の矢を立て、横取りするが如く交渉して、トレーラで陸上を運んだのはこの私であつた。その運搬代は百四十万円。

さすがに副会長をして居られた菱沼さんには大変御迷惑をかけた事になり、其の場で最敬礼のお詫びをした。

しかし現状を考えると、「飛燕」は特攻機として知覧から四十九機、沖縄特攻作戦全般で一〇三機が突入して居り、現在世界に一機より無いのであるから、知覧が展示に最もふさわしい場であると、勝手に思つて居る次第である。

参考の為ロスアンゼルス郊外チノ空軍基地に飛燕の機体の一部があった事をこの目で見ているが、一機を復原する迄には至っていない様である。

この様に今回の台湾、宮古、石垣への慰霊旅行は、非常に意義のある思い出深いものとなった。

ふり返ってみると、比島で一緒の方々、同宿した元気で物識りな丹羽さんと多く語りあい、また後半経験豊かな岩下団長の、有意義なお話しをお聞きする事が出来、アツと言う間の一週間であった。

末筆ながら、皆様の御健康と、御多幸を祈念申し上げ、末長く亡き隊員の慰霊顕彰、平和の尊さ、人命の重さを語り伝えて頂きたいと思つて居ります。降少尉。各小隊下士官一名のほか兵は高砂族で上等兵。

飛行部隊の編隊長は桐村弘三中尉で四機よりなり、各機操縦者二名。

11月26日(19年)夜リバを発つてレイテに向かった。月齢10日である。零時頃ブラウエンに着陸計画だったがその後の行動は明らかでない。

一機は我が勢力圏のパレンシヤに着陸し、第二十六師団と行動を共にしたことは確かである。

零時過ぎ頃、オルモックの軍司令部から東方の山系を望むと、盛んに火の

南海に特攻英霊を弔う

歌田 實

復員後59年振りに特攻協主催の慰霊巡拝に参加した。平均年齢75才、18名が全員無事予定通り肅々として遂行出来たことは大変喜ばしいことであった。

4月19日より4月25日までの間、台湾全島を略々一周し台南市、「飛虎將軍廟」、宮古島、「神風特別攻撃隊」、第三龍虎隊慰霊碑、石垣島「旧陸軍自保飛行場跡」、更に市内の伊舎堂家墓所に祀られている伊舎堂用久中佐と、夫々同行小久保隆福導師による慰霊法要を実施し、今回の慰霊巡拝の目的を



神風特別攻撃隊第三龍虎隊慰霊碑前での慰霊法要
(左から3人目、小久保隆福導師)

達し得た。その中で、第三龍虎隊は、実に20年7月29、30日と終戦16日前、三村弘上飛曹(墜空)以下6機が宮古中飛行場より沖縄へ特攻突入されたもので連合艦隊布告による最後の特攻隊であった。が実際は高雄警備府布告で九三式中間練習機に50kg爆装出撃されたものの様である。

次の第四龍虎隊(未出撃)、笹川敬二氏他の隊員が戦後慰霊碑を建立されたもので碑文に曰く「背を丸め深く倒せし操縦桿、千万無量の思い今絶つ」とあり正に突入寸前の決心、崇高な気持ちを含んであり往時を偲び感涙に咽んだ。

4月22日花蓮飛行場(現在は軍民併用)を車窓見学後花蓮駅より特急列車にて宜蘭市へ、到着後宜蘭旧陸軍中飛行場跡地を見学した。小生としてはこの地訪問が、目玉であった。

先ず所属部隊の飛行第24戦隊の戦歴を概述する。24戦隊はノモンハン以来の名門戦闘機戦隊であった。満州、北支、中支、桂林作戦(二回)、大東亜戦緒戦からパレンバン、ニューギニヤ(二回)、ラバウル、ビアク島攻撃、ハルマヘラ、レイテ戦と敢闘を続け、戦隊長横山八男中佐(土36期)は安達第18軍司令官搭乗機援護、空戦中被弾し海中へ自爆戦死された、(昭18年8月

2日、ニューギニヤ)、同中佐は飛行第64戦隊(加藤健夫少将(土37期)第四代の前、第二代戦隊長であった。レイテに於いては多数のパイロットを失い戦隊長庄司孝一少佐(土53期、第六代目)と、飛行隊長池上洋吉大尉(土55期)の2名のみが戦隊の将校という状況であった。以上のような経過で19年11月台湾、台中、台北北枝にて戦力回復中、我々土57期3名が12月飛行隊要員として、下士2名、少飛15期、特幹夫々5名計15名の操縦者が補充されたと言う状況であった。

本拠は広東(現広州)、白雲飛行場であり、ノモンハン経験の安喰大尉(少侯20期)も老練パイロットとして着任された(但し同大尉は汕頭にて戦死)着任後は九竜、啓徳飛行場に前進、南厦門より北汕頭間に至る南支沿岸を航行する、重要船団の援護作戦の任務を遂行した。

これは捷一号作戦の一環で着任早々20年2月から交替で船団援護中、3月23日、伊江島、26日慶良間列島に米軍は上陸を開始し、4月1日沖繩本島嘉手納正面へ上陸、沖繩本島西南方面海域は米、英機動部隊の蟠踞を許す状況となった。

戦隊は第13飛行師団から第8飛行師団(台北)隷下の第九飛行団に編入、

天号作戦と言つ沖繩戦に投入され4月1日宮古島へ展開、特攻機直援作戦を行つ、状況我に利あらず執拗な敵艦戦機攻撃を避け4月17日夜間台北松山飛行場へ後退引き続き直援、更に5月初め宜蘭中飛行場へ転進、此処から出撃する特攻機の往路一時間のみと言つ直援作戦に従事した。

この頃よりパイロット戦隊長も地上指揮となった。当時の宜蘭飛行場には105戦隊、19戦隊(三式)、24、20戦隊(一式、三型) 独飛43中隊(九九重偵)が展開夫々沖繩攻撃、直援、偵察を敢行した。

海軍は攻102神風特別攻撃隊、忠誠隊の一部10機程度が沖繩攻撃を敢行しつゝあった。この頃我24戦隊将校パイロットは宜蘭北部礁溪温泉に宿泊、忠誠隊士官も同宿した。たまたま忠誠隊を率いていた元木恒夫大尉(兵72期)は千葉県佐原中学出身で筆者の同級生、鈴木脩君(千葉中、兵72期、潜水艦)を良く知っておられ、同県人の誼で(筆者歌田、土57期津田沼町)夜は千葉県の話で懐かしかった。

同隊は宜蘭より出撃、戦果を挙げたと後で聞く。

6月18日戦隊特攻隊命下があり小生、大中、河村の3名は夫々隊長を命ぜられた(神州隊一、三隊)。早速宜蘭東

方海上、危山島上空々々で敵襲を警戒しつゝ特攻訓練を各隊毎に実施した。

6月23日の沖繩が陥落してからは戦況は中弛みの感もあつたが相変わらず特攻機は出撃していた。しかし黄色のままの練習機、使い古しの97戦等々なるとお粗末な事かと嘆かれた。又操縦時間100時間に満たぬ若い少飛隊員などは、爆装のため離陸に失敗脚を折り空中集合できない者もあり、これまでしつゝこの作戦に疑問を感じた。7月初め我戦隊は北部員山区に設営された西飛行場へ移転し、街を離れて初めてニッパで作られた兵舎へ入った。

以降本土決戦に備え、次は朝鮮金浦飛行場へ行くと言ふ事であつたが我々も出撃することなく終戦を迎えた。

さて懐かしの宜蘭飛行場跡で一番大きかった中飛行場を訪ねたが滑走路のコンクリートは所々残っており、あとは畑にも転用されままの一面茫茫たる現状であつた。当時を思い出すと北面離陸し、左旋回すれば眼下を流れる宜蘭河が目に入る、当時としては可成りの堤防が続いていた。戦時作戦中のこととて沖繩の情報以外、宜蘭の兵要地誌も皆目眼中になく遠撃戦、特攻訓練のみに明け暮れていた。今回の巡拝に備え宜蘭市の事を少し調べて見た処、

台湾領有後、総督府を設置し統治をし

たのであるが様々な困難があり当蘭陽平原は年々、宜蘭河の水害により多大の被害に悩まされていた。

明治30年、西郷隆盛の長子、西郷菊次郎(大島、童愛加那が母)が総督府役人として宜蘭厅长(郡守)に任ぜられ着任、在職5年6ヶ月、明治35年まで大変苦労して治水工事を行い多年の水害より当地方を守つたことで、難工事に従事した民衆はその恩沢に感激して自発的に碑を建てて西郷厅长の徳政を称賛した、大正に至る迄施工された工事は総延長6mに及んだ。

この工事は台南市の嘉南平原でも慕われ難工事を成し遂げた同じ総督府土木技師、八田興一博士の烏山頭ダムの水利工事(これも今回巡拝団は訪れた)と共に台湾の二大治水、水利工事と称された。西郷の築いた堤防は戦後の現在も「西郷堤」と称され明治38年建立された「西郷庁憲徳政碑」は今も宜蘭河西郷堤上に現存し、当日我々一行は碑に参り西郷菊次郎厅长の功績を偲んだ。

西郷はその後明治37年に京都市長に就任ここでも有名なインクラインによる疎水工事などを手がけ実績を残した。(因みに菊次郎は17才、父に従い西南戦争に出陣右脚に被弾し、膝から下を

切断し、生涯隻脚であつた)。

員山西飛行場を去る時兵舎の傍を流れる溪流で、ノモンハン事件で磯我中将(当時の集団長)より授与された部隊感状を焼却せざるを得ず、昭和14年以來部隊本部行李にしまわれていたことが残置者として悔やまれる所であつた。

宜蘭、花蓮上空は隼、飛燕、零戦に代わり台湾空軍のスクランブル機「ミラージュ戦斗機」が二機編隊で飛んでいて、感無量であつた。

我々同期生(土57期)は800名の各種操縦者中91柱の特攻英霊を出している、これは二階級特進した数で攻撃途次の戦死者、特攻要員でなく敵艦船に突入自爆した戦死者を加えれば30、140名位と推計される、その大部は比島、台湾、沖繩、内地防空戦、特にB29へ体当たりした同期もおり何れも21、23才で護国の鬼と化した、

あの顔、この顔が、59年経ても思い出されるが今回の慰霊巡拝に参加し、生存したことで少しでも心中の蟻りがとれた様な気がする。岩下团长、引率責任者菅原理事長、団員皆様方には大変お世話になり、厚くお礼申し上げます。特攻勇士在天英霊の鎮魂と慰霊並びにその顕彰を祈念するのみであります。

(合掌)

以下項を改めて、若干の今次旅行の感想を記した。

- 一、「飛虎將軍廟」は初めて聞く話だったが昭和十九年十月十二日、台南上空航空戦で被弾降下した零戦が部落を避けて上昇飛び去り郊外畑地で戦死された杉浦茂峰少尉の霊を祀ったもので現地台湾の人達の謝恩精神の発露と、戦斗機乗りとして徒らに人命を損なわれないという今生最後の使命を達した史実を伝えてくれるものと思う。我航空自衛隊でも先年三佐同志が訓練中事故のため市街地を避けて河原へ墜落共に、殉職されたことがあったがそれきりあとの話は聞かえて来ない、これは杉浦少尉と同じことではあるまいか、台湾の人達の慈悲、謝恩、敬愛の心に打たれた。
- 二、旅行は整然と行われ一名の落伍もなく皆様の真摯な行動、お気持ちがお成功を導いたものと思う。
- 三、石垣、伊舎堂中佐慰霊は同期星整清滋氏も同行されて居られ又、甥の用八氏、ご親族の方のご案内もあり、八重山記念館ご出展の資料と共に今回の白眉であった。これも中佐の責任感、高潔なご人格、郷土愛の賜であり沖縄航空緒戦で突入任務を果たされた事は頭の下る思いである。同期の末吉康助氏著「千尋の海」を拝

読したが執筆者も先般亡くなられ、謹んでご冥福をお祈りします。

- 四、街の中、日の丸と青天白日旗が併立掲げられて居り、台湾の人々の旧宗主国に対する気持ちに感激した、日本の統治が良かったものと判断する。
- 五、今回の中田添乗員は良くやっと思つ、気配り、能力、又人格も優しく最高の添乗員であったと感謝する。
- 六、今後の方策 海外は一応完了されたので国内慰霊廻りの計画を立案されることを願います。

手が上がるのが見えた。これだけの徴候では着陸成功し戦果を上げたかどうかわからない。

米軍の記録によれば、ドラッグ海岸付近に二機着陸し、乗員が闇の中に消えていったという。多分これが脊梁山脈を越えた三機の中の二機であろう。その人達がどのような活躍をしたか

残念ながら詳らかでない。ジャングル内の行動に長じていた高砂族の兵士だから、只では死ななかつたと思う。ところで、轟空挺隊を差出したあとの遊撃中隊は、三つに分かれマニラから船でレイテに向かった。

- 11月28日 豊田准尉以下二八名
- 11月30日 尾山中隊長以下主力
- 12月1日 茶園曹長以下二二名

将来への誓い

丹羽 等

私は今迄毎年4月の第2土曜日に、靖国神社で行われている飛行105戦隊の慰霊祭に、必ず出席して来ましたが、これからも慰霊祭が続く限り出席を続けます。

戦友会が解散したならば、その後は協会の春の陸海軍特攻戦没者合同慰霊祭に、私の足腰の立つ限り、岐阜から娘の手を借りても出席を続けます。

旅行中のバスの中でお話ししましたし、又台南のホテルでその姿をお見せしました、陸軍少年飛行兵の軍装姿で参拝を続けます。

そして全国の新聞記事に、最後の陸軍少年飛行兵が、軍装姿で靖国神社に参拝を続けていると報道されることを

目標にして頑張る積りでおりますので、今回の台湾・宮古・石垣、特攻発進基地巡拝慰霊旅行に参加された方々のみならず、会員の皆様方にも宜敷く御声援を賜りますようお願い申し上げます。

私達105戦隊は、昭和20年4月頃宜蘭の新飛行場に展開したが、飛行機は海軍が使用していた民間空港の北、約2軒程離れた敷の中に分散し、特攻出撃時には、新飛行場迄5〜6軒はあったと思うが、地元防衛隊の一つ星の兵士が、飛行機1機に10数名が取り掛って手で押して、2時間も掛けて移動させ、作戦が終ればその逆で、真暗闇の中を沈頭山と云う部落迄、本当に兵士達には苦勞をかけたと思う。

5月の或る日、10数機を特攻出撃させる日に、スパイの通報があったのであろう。10数機の特攻機が、タッタ2機のP38の餌食にされたのは、無念の極みであった。

この中で第二陣の尾山中隊長以下はカモテス海で空襲を受け海没、全員戦死。

第一と第二陣はイビルに上陸、第二十六師団に配属されて戦闘、茶園曹長と高砂族の兵一名が生還し、史実を伝えた。

高砂族の戦死者は靖国神社に祀られてはいるが、年金等は一切受けていない。



少年飛行兵姿の田羽 等氏(花蓮駅前)